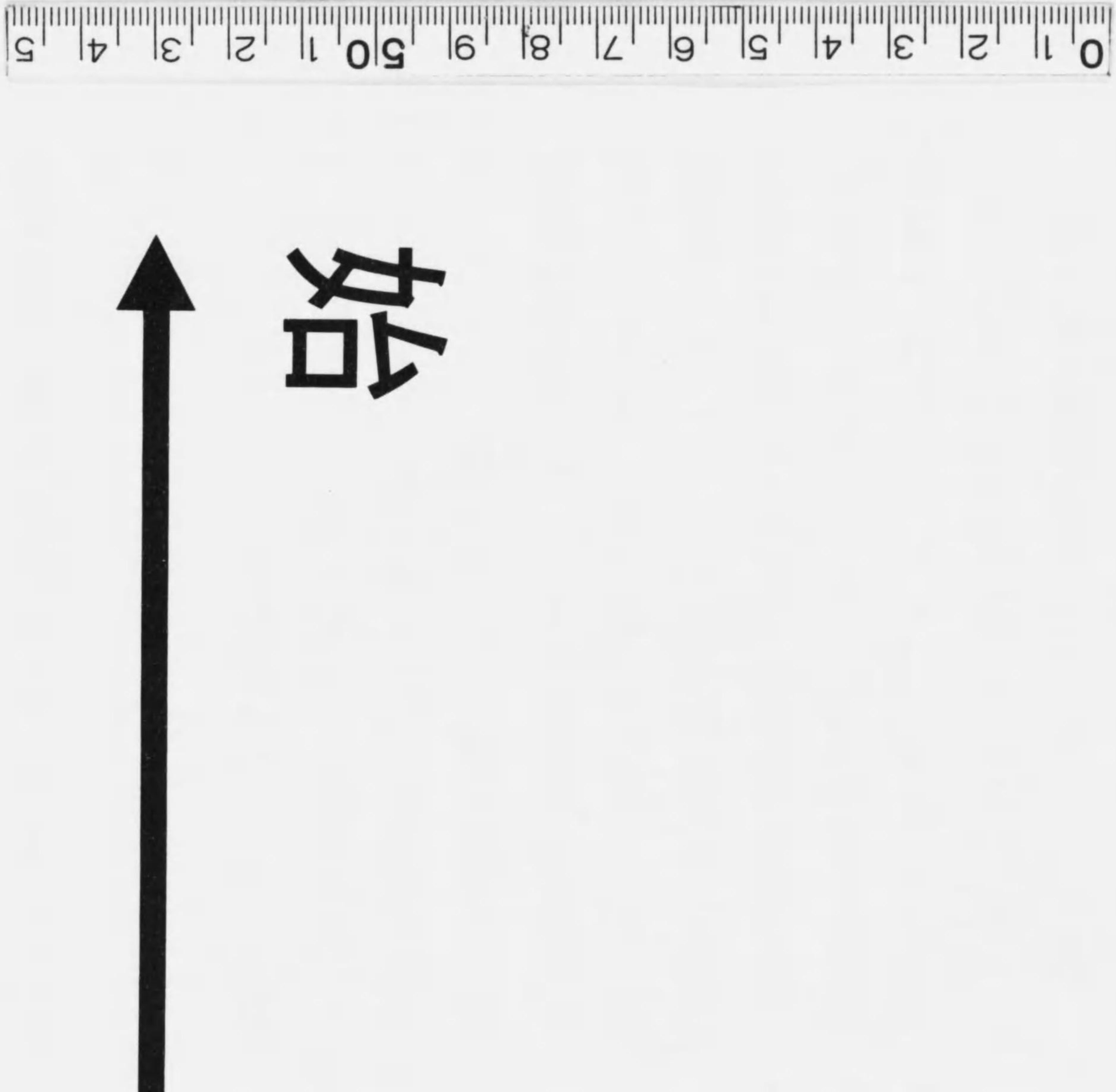
911.56
H68
911.56-H687
1200500756621
X
複写



911.56
H·68

平田内藏吉

美人はしの苑

山雅房版
綜合文化選書

昭和十五年一月
帝國圖書館

911
29

序

生の本能と死の本能の體驗を、追體驗を、科學によつて分析し、文學において昇華すること、これがこの書の各章各節を一貫した願ひであつた。苑には花ばかりではなく、蕾もあれば實もあるであらう。しかしその一つ一つが、皆生命のうたをうたつてゐる。私は苦しむ人の平安を、病む兄弟の安靜を、混亂する世界の統一を、願つて、その詩をうたつて行つた。

目次

序……3
わたしは生を讃美する……13
わたしは生を讃美する……15
生きてゐる少年……26
笑つて生きてゆけるであらう……32
一人一人のお醫者さん……37
眞白の花を需めて……39

生きるものは美はしい……44
一人一人のお醫者さん……49
生命の神様……56
あなたは夢見ることができるであらう……59
父親よあの子の臀をぶんなぐれ……63
皮膚物語……66
醫神は生きてゐる……69
ある力……73
蟻と夕顔……77
お醫者さんには權利がない……80
泣聲アパート……84

あなたは出すのを惜んでゐる……88
幾度か安靜のうたを……91
苦しまないで生きてゆく……94
美はしの苑……98
美はしの苑……100
愛より他に何もない……127
かたみの花……136
彼はかくの如く草木に語つた……140
石に代つて叫ぶ者があつた……185

石に代つて叫ぶ者があつた……187
ヒマラヤの雲……192
天は世界を包んでゐる……198
橄欖の實……204
世界は統一されてゐる……211
正氣は草木に萃つた……213
世界は統一されてゐる……232
萬歳のうたを……234
君は默つて答へない……236
死をみそぎたまふ……238

うたふ神神……244
太陽と神籬……247
まるい海……249
圓い海は……251
死ぬことは……252
生きることは……253
あるべ夕……254
山の性はあくまで高く……255
闇の中に水が光る……256
肉體がどこまでもいつまでも……257

君は落ちて行く無法の勇者……258
影　は　石……259
死　は　生　き　た……260
残　つ　て　ゐ　た……261
心臓の上へこぼれた一輪の花……262
お前が私を愛したのだ……263
焼かれてしまつた……264
寫　眞　は　う　そ　だ……265
彼　笑　ひ　彼　哂　ふ……266
「すべては君が悪いのだ」……267
悲しみはみな喜びの子であつた……268

今夜の月はゆがんでゐた……269
君は死ぬ前も死を知らず……270
少年はただ死ぬことをもとめたのだ……271
嵐が又に切られてゐる……272
生　き　る　う　た……273
跋……276

わたしは生を讃美する

わたしは生を讃美する

醜いものへの反抗は閉ぢられた。卑怯をなぐつた、この拳は封ぜられた。本當を告げる、この唇は縫はれたのだ。

私は弱い少年だ。

その少年の生きる力は、大人のどんな人よりも、強い願ひをもつてゐる。いかなる力も、勢ひも、うち消すことはできないのだ。

大人らは、どこでもここでも、闘つた。

少年の、闘ふことは、止められた。
止められてもとめられても、私は生きねばならなかつた。
國國は、勇ましく、力のかぎり戰つた。
少年の、戰ふことは、容されなかつた。
卑劣な顏が、横行した。雜文どもが、威張つてゐた。正邪をこえた、
規則があつた。
私の身體はその中で、毎日力に盛り上り、私の生命は、あふれてきた。
血走る眼、强壓の諸手、冷笑の口、怒罵の歯たちは、みんなで生命を、遮つた。
私は反抗しなかつた。かんしやく玉を手造つて、時時それを投げつ

けた。その手も、やがて止められた。私は反抗しなかつた。
私は帽子を、ぬすまれた。私は靴を、うばはれた。私は反抗しなかつた。
私の樂器は、棄てられた。私の歌は、破られた。私は反抗しなかつた。
反抗は、私の心へ流れこみ、私の心は渦卷いた。私の心は分裂した。
學校の門は閉ざされた。友への道は絶ち切られた。家への道も失つた。私は反抗しなかつた。
あやまれ。あやまれ。うそでもあやまれ。
現實の、わたしの心が、ささやいた。
そのいつはりの謝りを、いくたびか、わたしも、かつては、やつて

きた。

もしも、わたしに、人間に、一つの良心が、ないならば、なほ、いくたびも、いくたびも、わたしは、それを、したであらう。わたしはそれを、たへただらう。

良心を、だますことには、かぎりがあり、そのかぎりを、はつきりと、わたしは、今こそ、みつめたのだ。

良心のみが、高ければ、人の心の緒は狂ひ、本能のみが、強ければ、人の心の荒れるのを、わたしは、かつて知つてゐた。

わたしは、しかし、希んでゐた。その良心を、高くして、その本能を、強くして、亂れない一つの、少年の國を。美はしの苑を。

その良心を、低くして、その本能を、弱くして、ぼんやり、生きて

ゆくことは、わたしの生理が、ゆるさない。

わたしの小さな良心が、わたしに小さな死を命じた。

わたしの生の本能が、今、死のそれに、轉化する。

わたしは、生きて、生き拔きたい。

あ　あ、その生きる、その願ひが、わたしを、死へと、追ひやるのだ。

わたしは、生を讃美する。死を、美しいとは、おもはない。

わたしは、靈の、その不滅を、信じたい。信じたい。

わたしの、魂は、その眼で、みんなや日本の行末を、見たい。見たい。

それでも、いまは、わたくしは、靈の不滅と、その不死を、信ずる

ことが、できないのだ。
わたし個人の霊魂は、わたしが死ねば、無くなるのだ。わたし個人の眼の霊は、わたしが死ねば、消えるのだ。
それでも、わたしは信じてゐる。生きてゐる人の、霊魂の、万世不朽の、その力を。
それゆゑ、わたしは信じてゐる。一人一人の小さい死を、のりこえ、のりこえ、のりこえて、人類に、愛と平和の成ることを。
みんなよ。日本の中に、人類の内に、わたしにかはつて、生きてくれ。
戰ひに死んだ人人も、病ひに死んだ人人も、みんなみんな、小さな個人を失つた。

みんなを、泣かせたり、困らせたり、うらんだり、のろつたりする、そんな死を、わたしは、かつて、知らないのだ。
小さな、小さな、わたしの死よ。
宇宙の、微塵粉、わたしの死よ。
みんなよ。泣くな。悲しむな。わたしは、獨りで、進んで行く。沈默の中へ。空の内へ。
先日母や弟らと、つれだつた、武藏野の山へ。いこひの森へ。秋草の苑へ。
わたしは、そこで、墜落する。わたしは、そこで、分解する。誰も居ない處で、美はしい自然の中で、草木となつて、くちて行かう。
わたしのくだけた形の中で、みんなよ。自然を、仰いでくれ。

さようなら。わたしは、愛し、誇つた、學校の生徒として、失せてゆかう。そして、みんなを、生かしたい。わたしには、なんの、力もなかつたけれど、みんなは、わたしの死をみるとき、きつと分つてくれるであらう。生の幸福と、生の力を。

わたしは、それがうれしいのだ。

それゆゑ、親しい友達と、高笑ひして、別れたのだ。

弟よ。父母よ。祖母よ。一度も、時間におくれなかつた私が、今日だけは、永遠に、時間に、遲れよう。

もはや、家には、かへらない。家の前さへ、通らない。わたしは紙を、買ひもとめ、一本の鉛筆を握りしめ、西に向つて、走つて行つた。

わたしは、小さな驛におりて、かなたの山へ、登つて行つた。

あの梨の木よ。栗の樹よ。あの下に、かつて、弟が立つてゐた。あの上に、かつて、私が、登つたのだ。

秋草は、はや夕風に亂れ、みだれ、母の手をひいて、登つた丘が、暗くなつた。空はだんだん、曇つてきた。やうやく寒くなつてきた。下には、電車の轟音が、わたしを促して、走つて行く。西へ。

父母よ。祖母よ。弟たちを、育ててくれ。私のやうに甘やかさず、わたしのやうに愛しすぎず、どうか、しつかりと育ててくれ。

わたしは一人で、極樂や、天國などには、行かないのだ。暗い、靜かな、安樂の旅へ、自在を求めて行くにしても、わたしの心も、この身體も、みんな、このまま、碎くのだ。それでも、わたしは、生きるのだ。みんなの中に。日本の内に。人類の裏に。

天國は、やがて、この世にくるであらう。
極樂は、やがて、この世に成るであらう。
天國や極樂が、この世にきつとあらはれるために、多くの人人が、昔も今も、みづからはてたこともあらう。その人たちの、ある者は、きつと願つてゐたであらう。人人の不幸が、たつた一つでも少くて、世界が平和になるやうに。人類が、もつと愉快になるやうにと。
わたしは、だから、笑つてゐる。わたしは、わたしが無くなつても、みんなの生を、信じてゐる。わたしは、それで滿足だ。
わたしはうそを言はないで、ほんとに良かつた。よかつたのだ。それゆゑに、わたしは笑つて碎けるのだ。
わたしは外に弱かつた。わたしは內へ突進した。

わたしは外に從つた。わたしは內へ爆發した。
弱いにせよ。强いにせよ。わたしは惡いとおもはない。わたしはみんなを愛してゐる。わたしは希望をもつてゐる。みんなも、これを、かなへてくれ。
あ　あ。書きたいことが一杯だ。胸一杯に迫つてくる。もう、眞暗な闇の中で、わたしは、遺書を書き終る。盡きない遺書を、書き終つた。

二六〇〇・九・二八

生きてゐる少年

君にわたしは、虚言をすすめた。君にわたしは、常識をおしへた。
君にわたしは、詩を隠した。
あまりに本當のことをいふな。
あまりに良心的であるな。
いく度か君に忠告した。君はますます本當を言ひ、いつでも君の良心を、君の日記に刻んでゐた。

なぐつても、たたいても、君は、頭をうなだれたが、相撲ふと、私は投げられた。
私が詩を記す時、君はピアノを、鳴らしてゐた。
君は私より大きくなり、強くなり、美しくなり、むしろ私を包んできた。
君はひとりで闘つた。君はひとりで苦しんだ。君は獨りで愛してゐた。
只一つ、私は歳を誇つてゐた。その誇りも、君は無慘に、うち碎いた。
君ははや、すでに私の神となり、物言はぬ眞如の命となつたのだ。
机の上の推敲を、君は生命で推敲した。私が隠した、私の詩を、君

は立派に成就した。

跌坐した私の沈默を、君は今こそ、大喝した。

私は生田のせせらぎの中で、碎けた君の、身を抱き、いつまでも、君の生命の、詩を聽いた。

蟲の聲ではなかつたのだ。水の音ではなかつたのだ。身に泌みる、風のひびきでもなかつたのだ。

それは生者の歌であつた。不滅の生の轟きであつた。

地球が滅びて、一人の人間も、一匹の生物も無くなつても、尙、どこかの天球で、承けつぎ生きて行く、永遠の、少年の合唱であつた。

それは、大人や老人や、父や母をあはれみ、愛する音樂であつた。

戰爭や、疾病で倒れる若者たちの、曲げることのできない、不思議な

ひびきであつた。

私は泣くことができなくなつた。

この音樂たちが、行列して、私の腦髓の、廻轉路を、ぐるぐる、ぐるぐる、走つて行く。

その音樂の色彩が、瞬間、透明な、青紫と碧色に見え、突然、セピヤと灰色にかはる。

私はいつまでも、この音樂を、ききつづけるであらう。若い者、幼い者が、私の親となるであらう。私は小さくなり、圓くなり、やがては胎兒となるであらう。

君は、最初の私の親だ。若い日本が、世界の親となるやうに、君は生命をかけて、私を產み、生の詩を生み、物言はぬ愛をうんだ。

君は愛されることを拒み、愛することを、選んだのだ。私は君を失ひ、君は私を生んだのだ。

君は憎みを愛のそばに、並べることを、嫌がつた。愛と憎みの混淆を、その身をもつて、引き割いた。詩と虚飾とをひきさいた。汚れた心を滅ぼした。

成長すべき、誇るべき、頼るべき君の姿は、宇宙のどこにも無くなつた。そして、潑溂と自由な、何物とも爭ひ闘ふ、勇ましい日本の少年達が、永遠に生れて來る。君は、生れ變り、産れ更り、いつも生きてゐる少年だ。

私は、苦しむ少年を見て、悲しまう。私は、悲しむ少年を親て、憤らう。私は、君の靈の前に、ただ、結迦して、無にならう。

私の全ては墜落する、その中で、ただ一つ立ち上るものがあるならば、それはたしかに、今も在る、君の直毘の靈であらう。

笑つて生きて行けるであらう

どうして、そんなに死にたいのか。死にたくないのに、死にたいのか。昨日(きのふ)も今日(けふ)も死にたいのか。生きねばならぬのに死にたいのか。

ぶつつかるから、はねかへり、求めるから、あたへられず、泣きさけぶから、ふりむかれず。藥をもとめ、診斷をもとめ、病院をもとめ醫者をもとめ、どうして、そんなに、死にたいのか。

疲れたからか。悲しいからか。腹が立つからか。

嬉しくて、生きたい人は、ゐないのか。喜んで、生きたい人は、ゐないのか。生きたくて生き、生きたくて死んで行く人はゐないのか。

死にたいのに、生きて行き、人類の中で、死なれるのに、自分のために、死にたくなり、戀愛のためだといつて、自分のために、死にたくなり、金儲けになるといつて、自分のために、死にたくなり、死にたくて、死にたくて、死ねない人が一杯ゐる。

死がこわいから、死にたくなり、病氣がこわいから死にたくなり、詩を知らないから、死にたくなり、都合が惡くなると死にたくなる。

死にたいのに、生き、生きたくないのに、生きてゐるから、

生き切れず、死に切れず、

死に切れず、生き切れず、

いつまでたつても、生きられない。

誰か、生きたくて、死ぬ人はゐないか。

誰か、毒杯を呑むものはゐないか。

誰か、詩をうたつて死ぬ人はゐないか。

誰か、正直に生きたい者はゐないか。

彼は、長命を盡して、死にたくなり、死にたくなれば、死に切るであらう。

彼は戰に出でて、死にたくなり、死にたくなれば、死に切るであらう。

彼は、歌ひ切る時、死に切るであらう。

彼は、君命によつて、死に切るであらう。

病によつては死にたくならず、困難によつては死にたくならず、權力によつては死にたくならず、不合理によつては死にたくならず、花のあるかぎり、星のあるかぎり、この世に酸素がたえないかぎりは、生きて、生きて、生き拔くであらう。その彼こそ、いつでも喜んで、笑つて死んで行けるであらう。笑つて生きて行けるであらう。

1人1人のお醫者さん

眞白の花を需めて

線路もない、區劃もない、棘と石塊の道を、わたしは、獨りで、さまよつて行つた。

わたしは、襤褸を身にまとひ、布の帽子を戴いて、乞丐(こつじき)しながら、遍歴した。

動物たちが、わたしを迎へ、わたしは、その虎に乘り、象にのり、ある時は獅子にのり、鰐に乘り、さまよひながら、詠つて行つた。動

物の詩を、歌つて行つた。

もしも、その詩を忘れた時は、布の帽子は頭をしめつけ、もしもその詩を語らぬ時は、動物たちは、荒れ狂つた。

悲しむ動物や、苦しむ動物を、それゆゑ、わたしは、うたつて行つた。

その晝が盡きて、夜がくると、わたしは脚を組み、眼をひらき、しづかに息を、ととのへた。その息の響きは、誰にもきこへず、わたしは、舌を、顎に着け、兩手の指を、しつかり支へて、生を左にまねき寄せ、死を右側におびき寄せ、その結婚を、祝福した。

そのときに、わたしの腹は、大地となり、鐵の柱が、腰から立ち、わたしの輝く、眼の靈は、二つの、天の窓となり、わたしは、空を、

飛びまはり、わたしは、時を、流れて行く。

その夜が盡きて、朝がくると、わたしは、脚をひらいて立ち上り、鐵の扉へ、突進した。

わたしのもろ手は、拳をつくつて、進んで行く。

わたしの足は、音も無く、踵を土に、踏みこんだ。

わたしの息は、氣を合はせ、拳は一つの、鎚となり、鐵の扉をうち破る。

扉のかなたに、山があり、わたしは、坂を、上つて行つた。

わたしは、頂に立ち上り、そこで、一つのピストンとなつた。

頭の眞中から地の中へ、頭の最中から、天の中へ、わたしは無限を上下した。

その時、天は下つてきた。地はその天へ、上つて行つた。
垂直線が、上下した。力は一點の、位置となり、身は一線の、軌跡
となり、息は一連の、詩となつた。
わたしは頭を、失つた。
わたしは胸を、失つた。
わたしは手足を、うしなつた。
わたしは言葉を、うしなつた。
わたしは、ただ垂直に、伸びて行き、ただ垂直に、縮んで行き、
もはや一つの、護謨となり、毬となり、山の上から、轉んで行き、
飛び上り、跳ねあがり、躍りたち、麓の原へ、下りて行つた。
その麓には、驢馬が待ち、わたしは、その背にまたがつて、わたし

の眞白の花を需めて、その日の放浪へ、出發した。

生きるものは美はしい

生きるといふことは、生きたいといふことであらう。

本當に死にたくなれば、誰でも死ぬことができるやうに、本當に生きたくなれば、誰でも生きて行くであらう。

その誰でも、仲仲本當に、死にたくならないであらう。その誰でも容易に本當に、生きたくならないであらう。

自分のことを考へてゐる間は、本當に死にたくならないであらう。

自分のことを考へてゐる間は、本當に生きたくならないであらう。

世界はだんだんせまくなつた。世界は一つになりはじめた。

ほんとうに死にたくなつて死んだ人らの血や肉が、地球の土にしみこんだ。ほんとうに、生きたくなる兒が、一人や、二人、この世にでて來る時が來た。

わたしはその生を讃美する。

わたしはその生を讃唱する。

私はその死も讃美したい。それでもそれはできないのだ。私は生のみ知つてゐる。私は生より知らないのだ。

その健康は美はしい。癒つて行くのが美はしい。生きて行くのが美はしい。

美はしいから健康だ。美はしいから癒つて行く。美はしいから長生する。すべての生きるものは美はしい。世界はすべて美はしい。宇宙はすべて美はしい。美はしいものは花も星も、みんな生きてゐる。いきてゐる。

その美はしい生のなかに、どうして病があるのだらうか。どうして死ぬ人があるのだらうか。どうしてみんなを生かすために、戰に死に病に死ぬ人が、なければならないのであらうか。

完成した詩はなかつたのだ。花は散らねばならなかつた。すつかりその實ができたのだ。兎は死なねばならなかつた。獅子が髦をふるふのだ。ある國の旗はおろされた。若い國家が進むのだ。

幾萬の戰屍、幾億の病屍、その屍はうたはなかつた。その屍を踏み

超へて、多くの都市が占領され、歡呼の聲がひびいてきた。その屍を觀察して、醫學は絶えまなく凱歌をあげた。

單調な弔の歌や、强剛な軍歌の中から、和らぎの詩が生れてきた。世界は詩を否定して、だんだん詩に近づいた。

詩は和らぎのうたであつた。それは休息の旋律であつた。それは息吹の韻律であつた。

人類はその鎮めの詩を、一度は一人殘らず合唱するために、地球の中に生れてきた。生きることをのみ讃美するために、人間に、詩の心があたへられた。

地球が絶滅するまでに、この生命の詩をうたはう。地球が粉碎されるときに、人間たちが一人ものこらず、平和の詩を合唱して、喜んで

死んで、永遠の宇宙の中に、千萬の物質となつて、星の中に、眞空の中に、散つて行くことができるやうに、私はひそかに祈りたい。

一つの病も、一つの屍も、お醫者さんらは空しくしないであらう。國家も社會も、みんなはお醫者さんになるであらう。國家も社會も只生のみを讃美するであらう。世界は一つになるでらう。

それまではたつた獨りで讃美の詩をつづけよう。

一人一人のお醫者さん

あの兒は琉球の毒蛇を、あの草叢で、踏みつけた。

あの兒は大聲あげて、逃げ、毒蛇は驚いて、咬みついた。人人はあの兒をとりかこみ、あなたの處へ、運んできた。

毒蛇は、草叢にかくれながら、音なく後を、追つてきた。

お金はあとで、持つてくる、

お金は、必ず、渡します。

人人はしきりに、大聲でさけび、あなたは、むやみに、その手を振つて、金を需め、泣きさうな顔で、頭は横に振つて、金を先づ求め、人人の一人は、悲しげに、東に驅け出し、人人の一人は、憤りながら、西に驅け出し、二時間、三時間、經つたであらう。

一人はやつと、歸つてきた。

お金はございます、血清注射を。

そこで、あなたは、顔を出し、あの兒は、内に、つれこまれ、やがて、人人の泣く聲がきこえ、人人は、罵りながら、あらはれた。

彼こそ毒蛇だ。

人殺しだ。

詐欺だ。

人人は、罵りながら、かへつてゆく。

あなたは、蒼い顔して、戸口に立ち、ぼんやり、それを見送つた。そのあなたを、人人は毒蛇といひ、人殺しといひ、あなたの手當の、遲れたのを、詐欺といふ。

わたしはしかし、知つてゐる。あなたの貧しさと、苦しみを。

あなたがその島に、渡つた頃、いつでも、誰にでも、たのまれるまま に、注射したり、乞はれるままに、投藥したり、夜中でも、早朝でも、すぐ飛び起きて、喜んで、手當したのも、覺えてゐる。

人人はその頃、約束を守らず、あなたに、金を、支拂はず、あなたは日毎に、痩せてゆき、あなたは、日毎に、考へ拔き、金を出さねば藥をあたへず、金を出さねば、手當をせず、金を出さねば診なくなつ

た。

それゆゑ、あなたは詐欺師でない。

それゆゑ、あなたは毒蛇でない。

もちろん、人殺しではないであらう。

わたしは、それを、知つてゐる。わたしは、それに、知つてゐる。

あなたが、他人を診ることを、心から、嫌がる、そのわけを。他人の病氣を、癒すより、自分自身の、お醫者さんを、あなたは、切に、求めてゐる。

あなたの心は、病んでゐる。わたしは、あなたに、祈つてゐる。むしろ毒蛇の持つやうな、自分自身の、お醫者さんを、あなたが、自分に、見出すことを。

それゆゑ、わたしは、誓つてよい。あなたが、あの兒を殺したのでは、無いことを。毒蛇が、あの兒を殺したのでは、無いことを。

無心の爬虫類は、誤解されて、毒蛇といはれ、あなたは例へられて毒蛇といはれ、人人はその一人一人のお醫者さんを、知らないから、藥の行き渡る時が、さようとも、注射が自由に、なされても、手術を無料で、受けられても、それでも、一人一人のそのお醫者さんを、人人が、いつになつたら、見出すか。わたしは、信ずることができないのだ。

傷いた鳥は、みづから癒し、痛んだ獸は、みづから休み、毒蛇は、踏まれても、斷たれても、自分で復も、生きかへる。

毒蛇は、文化を知らないのだ。毒蛇は文化を、恐れない。文化より

大きいものを、持つてゐる。文化より、深いいのちが動いてゐる。お
醫者さんを、自分自身で、持つてゐる。
あなたは、それを、知らないのだ。あなたは、それを、知らないで
ぼんやり、戸口に、立ちつづける。
毒蛇はやがて、草叢を出て、輝く姿を現して、戸口の前を、過ぎて
ゆく。

毒蛇だ

あなたは、あわてて、聲あげて、あなたのその戸を、しめたてて、
窓から石を、なげつける。
石はしつかと、毒蛇をうち、毒蛇は、動かなくなつた。
復、一時間、二時間、經つたであらう。あなたは、今は、戸を開き

あなたは、あたりを、見廻した。
毒蛇の姿は、見えなかつた。
わたしは、しかし、信じてゐる。毒蛇は再び、草叢にかへり、毒蛇
は、再び、生きてゐることを。

生命の神様

あなたは、癒るのが、恐いのでしよう。あなたは、癒るのが、お嫌でしよう。癒れば、損を、するのでしよう。

あなたが、病氣であるといふので、お父さんは、あなたを、扶助します。

あなたが、病氣であるといふので、お母さんは、あなたを、慰めます。

あなたが、病氣であればこそ、みんなは、あなたを、愛します。

社會は義務を、あなたから免じ、隣人は、つねにあなたに、親切です。

あなたは、永遠の幼兒となり、あなたの病氣は、癒えませぬ。

病氣の神神は、あなたの病に氣をあたへ、殺氣をあたへ、死氣をあたへ、憂氣をあたへ、憤氣をあたへ、あなたはいつも、どこまでも、自分を愛しつづけてゆく。病を愛しつづけてゆく。病氣の神様を、どこまでも、いつまでも、信じてゆく。

生命の神様は、たつた一人の氏子である、あなたの拜禮を失つて、お腹の中で、枯れるでしよう。

動物たちは病氣の神様を信ずるでしよう。あなたの草木は生命の神

様を知つてゐます。あなたの草木が花咲くときに、動物たちも靜かになつて、あなたの花苑で遊ぶでしょう。生命の神籬(ひもろぎ)は伸びて行き、生命の瑞穂(みづほ)がみのつて行くとき、生命の神様は、その玄(くろ)い光りに輝いて行くでしょう。

あなたは夢見ることが出來るであらう

あなたは寢ることができるであらう。兩手をひろげて。
あなたは眠ることができるであらう。兩脚をひらいて。
あなたは休むことができるであらう。枕をはずして。
あなたのからだが、寢てしまば、あなたは、もはや、ねむらうなどとは、望まない。
あなたの心は、水平に搖られ、ゆられ、ぐつすり、ねむりに入るで

あらう。

あなたは、かくて、夢みることができず、完全な、死の原型を、體驗する。

あなたが、どこまでも、どこまでも、毎夜の夢を、みたいなら、枕によつて、みるがよい。

遊仙の枕によつて、玄宗皇帝になるがよい。

玻璃の枕によつて、華南王になるがよい。

琥珀の枕。

豹頭の枕。

七寶の枕。

夜明(やみよう)の枕。

木の枕。護謨の枕、

あらゆる枕を、えらぶがよい。

枕に寄つて、寢るときに、あなたは、夢をみるであらう。

あとへ、あなたが貧しくとも、夢では王者になれるであらう。

たとへ、あなたが弱くとも、夢では勇者になれるであらう。

あなたが、熊に、おつかけられ、虎にくはれてみたいなら、じつとあなたの胸の邊(へ)に、その手をあてて、ねればよい。

墜落の夢を、みたいなら、うつぷせなつて、寢ればよい。

苦しい夢を、みたいなら、手足を曲げて、ねるがよい。

あなたは、轉轉反側し、聲を發して、おめいたり、ふらふら、さまよひ出るであらう。

かくして、あなたが、目覺めたときには、あなたは、夢を、みないであらう。眞晝の夢を、みないであらう。

あなたが詩を、うたふなら、晝間の詩を、うたふなら、あなたは夢を、みないであらう。夜中の夢を、みないであらう。

手を伸し、長股ひらき、枕はずして、夢無き眠りを、ねむれるであらう。あなたは一莖の草花となつて休らふであらう。

父親よあの子の臀をぶんなぐれ

父親よ。あなたは、あまりに、殘酷です。あの子が、叱られたい時に、あなたは、優しく、さとします。

あの子は、いつも、重荷を負ひ、あの子は弱つてしまひます。

父親よ。あの子の臀を、ぶんなぐれ。

赤くなるまで、ぶんなぐれ。

あの子は、なぐられたいために、うそをつき、物をぬすみ、なまけ

てばかし、ゐるのです。

あの子の顔と眼を守り、あの子の胸を、突かないで、あの子の腹を蹴らないで、

可愛いあの子を、ぶんなぐれ。

あの子の臀のみ、ぶんなぐれ。

あの子の腰と、お腹との、その眞中の、中處、生命の藏の、戸を開け。

涙を流して、喜んで、あの子の、臀を、ぶんなぐれ。

あの子の腰には根が生える。あの子の腹には葉が茂る。あの子の胸には花が咲く。

あの子はあなたに向つてくる。あの子はあなたにぶつつかる。あな

たはますます強くなる。あの子はいよいよ強くなる。

あなたのなぐらなかつた子は、みづからなぐつて苦しんだ。あなたに向つてこない子は、みづから碎いて亡くなつた。

父親よ。殘つたあの子をぶんなぐれ。あなたに向つてくるやうに。あなたを倒しにくるやうに。あの子の動物が強くなり、あの子の草木が生きるやうに。胸の花瓣が凋ばぬやうに、腹の樹の葉が枯れぬやうに。腰のその根が、強まるやうに。

皮膚物語

あなたの皮膚は、しつかりと、あなたの宇宙を、包んでゐる。
あなたの宇宙は、しつかりと、自然の宇宙を、包んでゐる。
あなたの内の、大宇宙。
あなたの外の、小宇宙。
その内の、その外の、二つの宇宙を、あなたの皮膚が包んでゐる。
小さな宇宙の戰爭や、飢餓や、不幸や、災害が、ひし、ひし、皮膚

に、迫つてくる。
大きな宇宙の煩悶や、迷ひや、憂ひや、悲みが、はつきり、皮膚に
あらはれる。
病は皮膚から、は入つてくる。病は皮膚から、癒つて行く。
知識は、皮膚から、覺えてくる。疲れが、皮膚からのがれてゆく。
心を、皮膚から、潔めて行く。汗が、皮膚から流れ出る。
皮膚は、目となり、耳となり、搖れる綠の髮となり、鼻とかわり、
舌とへんじ、膽(みのわた)たちを包んでゐる。
あなたの心の細胞も、しつかり、皮膚が、蔽つてゐる。あなたの大
きなコスモスも、皮膚の力を失なふと、だんだん小さくなつてゆく。
外なる膚(はだへ)。内なる膜(まく)。

あなたは、不思議な、風呂敷に包まれ、わたしも、いのちの、袋に包まれ。包まれて、包んだ、人間たちが、その包まれたコスモスの荘厳と、その包んでゐるコスモスの平和のために、

潔める。清める。みそぎを、始める。

醫神は生きてゐる

アスキユレピアスよ。君は、いのちの友であつた。死の防禦者であつた。

君は、傷を裹(つつ)み、病を癒し、全ての患者を全治した。

君は、木や草や、土や岩石の性(さが)を知り、人間の性(さが)を、とくに知り、心の底を、治療した。

君は、手術や、藥物や、妖(あや)しい方術(すべ)をしらなかつた。

君はただ、心を知り、おのれ自身の、心を知り、病める心に、休息を與へ、傷める葦を、安らへた。

木も草も、花もけものも、癒された。もちろん、人は治された。

君は、廣告や、宣傳たちに、用はなく、いつでも、默つて、坐つてゐた。

人人は、君の笑顔を、觀ただけで、自分で癒す、氣になつた。

冥府の王、プルートは、あわてて叫んだ。

死人が一人も無くなるぞ。

俺の仕事が無くなるぞ。

その兄、ジユピターは、怒つて命じた。

殺せ、殺せ、ふみ殺せ。

アスクレピアスをこそ、殺せ。

雷神は、かくて、君をば、打ち碎き、君の父ぎみ、アポローは、悲しんで、桂の花輪を、投げすてた。

山といふ山は、鳴動し、あの雷神をつくりなした、鍛冶の神は、殺された。

アポローは、ジユピターの怒りを、恐れもせず、襤褸の乞丐となつて、山を下り、君の亡き跡を、泣きつづけた。

わたしはしかし、信じない。アスキユレピアスの、滅びたことを。

藥をあきらめ、病院をあきらめ、死を待つてゐる人人のところへ、ひよつこりあらはれる、君の姿を、わたしは、時時、みかけるのだ。

美しくす直な心のあるところ、清く内觀る息の、やすろふ處、眼に

一杯涙をたたえて、じつとその胸を指(ゆびさ)してゐる、君の莊嚴な裸身(らしん)を、
わたしは、觀るのだ。

ある力

はねのけて生きる力、つきあげて生きてゆく力、生きずにはゐられない生きる力。これはどこから來たのであらうか。
親から來たのか、天から來たのか、虛無から湧いたのか。
止められぬ力。抑へられぬ力。病や苦しみや悲しみを、蹴破る力。
それが動いてゆく。
藥ではなく、醫者ではなく、つかまへることのできぬ身體の內で、

はつきり躍つてゐる力。

少しでも外に向ふと、衝突したり、激發したり、たちまちこはれてしまふ力。

少しでも内に向ふと、歡喜したり、勇躍したり、湧いてくる力。

この力が進む。この力が闘ふ。

自癒力とか、生命力とか、どんな名前でもつけるがよい。そのどんな名前をも蹴飛ばす力。

結核とか、腫瘍とか、壞疽とか、それがいかなる病であつても、そのどんな病根をも、打ち碎く力。

死を知らぬ力。破滅を恐れぬ力。

細胞といふその細胞の疲勞を覺し、血液といふその血液に抗體を與

へ、組織といふその組織らを活氣づけ、亂れた神經の隊形を整へて、大きな、われらの内なる宇宙から、太陽や、地球やの、小さな宇宙に號令する。

ある展開する力。

熱を出し、汗を出し、あの濃汁を出し、病根の廢壞を決して生きて行く力。

その吐を止どめ、あの下を和せず、瀉を禁じ、泄を遮る一切の智巧を、退ける力。

迷つて疑ふ心や、ゆらめいて逡巡する心や、反應を懼れる心を分けほどいて、しづかに生きて行く力。

病を息吹の中にみそいで行く力。

泣き叫ぶ母や、心弱い妻や、無智の隣人の親切な手當も、おだやかに斷ることのできる力。見舞や藥や强要の勸告などは、感謝してこれを退ける力。

蹴飛ばすその自分の力。生きてゆく力を外に求めないその力。

藥を求め、診斷を求め、他によつて癒えようとするその弱い心を、熱や、汗や、涙や、膿ともろとも棄て去る力。

一輪の野菊のもつてゐる力。そのもつてゐることを知らない力。見棄てられた、汚れはてた、破れた床の上で、貧しい人のみが知つてゐる力。

眞暗な、醫者の來ない、太陽もない部屋で、じつと内を觀るその兒らの心に、こんな力が、今與つてくる。

蟻と夕顔

蟻は屍(かばね)の上を這ひまはつた。その女は、お醫者さんの治療を受けなかつた。その夫は病氣で働くことができず、お醫者さんには、診て貰へなかつた。

死亡屆だけは出さねばならないといふので、それで始めてお醫者さんの往診を待つた。

お醫者さんは古びたモーニング着てやつて來て、眼瞼を診たり破れ

た毛布をはねのけたり、歸る時には請求書を置いたりした。

死體檢査料と診斷書代とで五圓。ほほけた夫はそれをみつめた。

その金があるならば、死なないうちに診てもらつた筈の金。その金は無い。その女は、その一錢の金も無いために、そのそれゆゑに死んだのだ。

死んでも金の要ることを知らなかつたその女。その夫もそのことを知らなかつたその女。その夫は、生きるにも死ぬるにも、かならず金の要ることを知らなかつたその女。

その女がさうであつたやうに、その夫の知つてゐるのは、涙を流すことだけだ。その涙に驚いた蟻は、今、屍の蔭にかくれ、今朝みつけたいもむしや甲蟲らの屍に、死亡診斷書の要らないことを、想つてゐ

た。

夕顔は屍を知らなかつた。涙を知らなかつた。落したのは輝く露であつた。その露の下から、蟻は屍までつづいてゐた。

お醫者さんには權利がない

お醫者さんには權利がない。化粧と訪問と、舞踏と夫婦喧嘩と、暴食によつて、胃腸病になつた貴婦人の、治療を拒否する權利がない。貧困と、營養不良と、不潔な住居と、あの混濁した空氣とによつて、衰弱した、勞働者たちを救ふ權利も無い。

お醫者さんは、押し寄せる患者を制限し、患者の身體と心とを、共に分析してゆくその余裕を、充分求める權利も無い。

お醫者さんは、藥を拒否し、手術を制限し、安價に治療をして、それでも、自分も、暮して行ける、そのそれ丈の權利も無い。

疲勞し切つたある夜半に、患者を拒む權利も無い。彼には商人になり切る權利も無く、學者になり切る權利も無く、藝術家になり切る權利もなく、彼自身、生きて生き切る權利も無い。

人は自ら癒えても彼のお蔭にした。

人は自ら死んでも彼のせいにした。

人人はある時、醫は仁術であると定義したし、人人はある時、醫を嚴密科學として要求した。

人人は彼を呪つて迷信に就き、迷信を遍歷しては彼に還つた。

ある人は、治療費を拂はないで逃亡し、ある人は、治療費を高いと

いつて罵つた。

お醫者さんは、ある時、貧しい人に施した。その貧しい人は限り無く、貧しい程に、高く曲つて、その自尊心を固執した。

ある者は診斷を要求しながら、診斷料を罵り、ある者は、手術を賴んでおきながら、手術を呪ひ、藥物を連用しては、藥を怨んだ。

お醫者さんは、患者の願ひに引き廻された。お醫者さんは、患者の需めに倒された。

お醫者さんは、馬鹿にならねばならなんだ。お醫者さんは、妥協をせねばならなんだ。

いつまでも、いつまでも、國營醫院はあらはれない。

癩病の不足病牀三萬餘。

結核の不足病牀二百萬。

隱された、性病患者三百萬。

かかる現狀において、人々は、健康か死か、二者その一つをしか選べぬことを、誰よりもよく知るお醫者さんたちは、何の權利もなく、力も無く、泣きながら、默つて眺めてゐた。

泣聲アパート

泣いても、泣いても、泣きつづけても、赤ん坊は抱いてはいけないのです。

赤ん坊は靜かにねかして、泣いても泣き疲れても、抱かないやうにするのです。抱かないでねて慣らすのです。

泣くからといつて抱き、泣くからといつてゆすぶり。泣くからといつてあやし、抱かれたいために泣くからといつて、抱かれるやうにし

てしまひ、お乳を需める泣聲と、抱かれたいための泣く聲と、泣聲と泣く聲が分らなくなつてしまひ、赤ん坊は大人になつても抱かれたくなり、男のくせにだださへこねれば抱かれたくなり、食つても食つても、飲んでも呑んでも、泣きたくなる、その赤ん坊が泣くのです。

このアパートで生れた赤ん坊が泣くのです。靜かに寢かせておくと泣くのです。

辛棒して一週間。

辛棒して二週間。

待つならきつと慣れるでせうに。お乳の時だけを、元氣正しく泣くでせうに。

それを待つてくれないのは、アパートのその女主人。

引き越すにも、今では家が無いのです。その家が、不潔な貧民窟ならば、その家が、高價な大邸宅ならば、あるにはたまにはあるでせうが、家といはれるその家には、みんな借手があるのです。たとへばどんな條件でも、きつと借手があるのです。赤ちやんのあるあなたらには、きつとその家が無いのです。

赤ちやんはきつと生れてくるし、きつと生まねばならないし、ああして生れてもゐるのです。そうしてあなたらには家が無い。あなたらのもぐりこんでゐるそのアパートでは、赤ちやんを生んではならぬのです。ましてや泣かしちやいかんのです。

その赤ちやんが生れてしまひ、その赤ちやんを今抱いて、行つたり來たりする廊下。外には雨がふつてゐるこの夕。そこであなたは聲を

きく。

しつこく舌打つあの聲を。

あなたはさかんにゆすぶりつづけ、みすみす、赤ちやんを惡くしつけ、みすみす涙をにじませて、しとどと汗をたらします。

赤ちやんの聲は泣き止まない。赤ちやんの聲は、日本中にひびいてゐる。

あなたは出すのを惜んでゐる

あなたは、出すのを、惜んでゐる。
あなたは、毎日、大便を惜み、
あなたは、毎日、小便を惜み、
玉なす汗を、出し惜み、
愛の涙を、出し惜む、
あなたは食らひ、あなたは儲け、あなたは毎日、貯へる。あなたは

いつぱい、物をもち、くさらせ乍ら、惜んでゐる。溜息さへも惜んでゐる。

あなたはだんだん、小さくなり、あなたは、だんだん、固くなり、
あなたは、だんだんちぢこまる、あなたは、だんだん弱くなり、あなたは、自分で、死んで行く。
吐き出せ。溜つた汚れた息を。
吹き出せ。くさくむれ立つ瓦斯を。
押し出せ。くさつた屎尿の量を。
美しいものに、涙を流し、大地へ深く、汗したたらし、腹に潔まる言葉の霊を、
息吹き下せ。歌ひ上げよ。

その全ての汚れを、その全ての滓らを、植物たちが潔めるのだ。青い花も、赤い花も、朱の葉つぱも、綠の葉も、唇をひらき、もろ手を擧げて、あらゆる邪惡を吸ふであらう。その根はあなたのくさつた物を、みな吸ひ上げて行くであらう。

あなたの汚れ、あなたのくされを、草木はとつて伸びるであらう。それは蘭氣となり、菊氣となり、鬱鬯の氣となるであらう。

それはにほひとなり正氣となつて、日本を世界を、包むであらう。

幾度か安靜のうたを

幾度か安靜のうたを、わたしは、くりかへしてうたつてきた。
眠りの詩を。
息ひの歌を。
幾度、わたしは、復それを繰りかへすのであらうか。
けれども、幾度、幾そたび、あなたも死の願ひを、繰り返すのであらうか。

あなたは、いつまでも、いつでも、絶望の淵を望んで、死を需め、生きてゐるのに、死をもとめ、くりかへし、またくりかへして、死を求める。

需めても、求めても、あなたは死ぬことができず、あなたは、苦しみながら生きてゆく。

あなたの痩せた身體よりも、あなたの心が枯れてゐる。あなたの内に、あはれな赤子が、泣いてゐる。乳をもとめて、叫んでゐる。

その兒は、死の噪音をきらつてゐる。休息の子守歌と、眠りの乳をその兒は、もとめておらぶのだ。

くらげのやうに、綿のやうに、身體の衣をぬぎ捨てて、その兒の聲をきくときに、あなたは、病を忘れ、滅びを失ひ、内なるいのちを、

知るであらう。そのとき、あなたは、安静の詩を、聽くであらう。音もなく、響きもない、眞空の歌を聞くであらう。

すべての樂音を破壞する、死の大音響は、消えるであらう。ねむの木らが茂るであらう。くれなゐの、その房狀花が垂れるであらう。美はしいその葉は閉ぢて、あなたの動物を潔めるであらう。

苦しまないで生きて行く

社會らは詩をうたはなかつた。
國家たちは戰つてゐた。
病める友らはうめいてゐた。
そのある人らは、死を待つてゐた。お醫者さんらは、ある時、死の宣告をした。お醫者さんらは、ある時、死の宣告を隱してゐた。
宣告しても、隱しても、病める友らは死を知つてゐた。病める友ら

は生きたかつた。安靜が、ほんとうに得られるなら、生きられること
を、直觀した。
安靜は、容易にあたへられなかつた。
安靜は、仲仲あたへられなかつた。
安靜は、絕對にあたへられなかつた。
社會らは詩をうたはなかつたから。
國家らは戰つてゐたから。
病める友らはますますうめき、人人は、ただあわただしく驅けまはつた。お醫者さんらは、死と懸命に闘つた。闘つても戰つても、死は日をついで押しよせた。生れても生れても、またその兒らも死んで行つた。兒らは大人よりも老人よりも、早く、多く、死んで行つた。

この世の與へない安靜を、この世の現さない平和を、死のみがたえず、惠んで行つた。この惠み深い死たちは、醜惡と苦惱の姿でやつてきた。

お醫者さんらは、いく度か注射の針を採り上げた。苦しみ丈でも除きたいと思つてみた。それでも麻醉は出來なかつた。それでも殺すことは容されなかつた。

お醫者さんらは毎日死の顏をみつめてゐた。惠み深い死が、どうして病める者らを苦めるのか。死の殘酷さに驚いた。悲しんだ。苦しんだ。

死らはお醫者さんらを嘲弄した。お醫者さんらは空しく鬪つた。血清がつくられ、新藥が發明され、手術はどんどん進歩した。死らはそ

れ以上に進歩した。

病める友らはひたすらに、お醫者さんらにしがみつき、藥にも、手術にも、全てのものにすがりつき、みな生きようともがいて行つた。

人間は、苦しまなければ死ねないのか。

お醫者さんらは考へた。

考へても考へても、死はたえまなく增してきた。一人の人が死ぬ毎に、千人の人が悲しんだ。千人の人が悲しめば、百萬の人が弱つてきた。

みんなは苦しんで死んで行つた。ある人は衰弱して亡くなつた。ある人は血を吐いて亡くなつた。ある人は傷ついて亡くなつた。みんなは苦しんでなくなつた。

かれらは詩を知らなかつた。
お醫者さんらは詩を知らなかつた。
社會らは詩をきかなかつた。
國家たちは詩を聽かなかつた。
みんなは詩を唱はなかつた。
詩は獨りで泣いてゐた。
その詩の涙から、千人の人がなくなれば、千五百人が生れてきた。
百萬の兒が亡くなれば、千萬の兒があらはれた。
その詩のひびきをきいて、苦しまないでゆく人があつた。苦しまないで生きる人があつた。その詩のきこへる處に、世界は統一されてゐた。不滅の宇宙が創られた。

美はしの苑

美はしの苑

杉は天をさして伸びて行つた。獅子は天に向つて咆吼した。人は眼(まなこ)をひらいて、みずからを知つた。

頭を垂れて國土を蔽ひ、黄金の瑞穂(みづほ)はその地にみちた。牝馬(ひんば)は秋風をさけて、西南に向つた。

あなたの流れが惱んで行く。あなたの魚が飛び上る。あなたの心が震動する。震動が、愛らを潔めて進んでゆく。睡蓮は、清淨の姿を、ゆらめかした。水の濁りが別けられた。

花菖蒲らがけむつてくる。泉に山が寫つてくる。あなたは途をさがして行く。威壓と愛にはさまれて。

鷲が野原に降りてくる。あなたは天を抱いて行く。雲間に咲いた、花輪菊。それもあなたは包んで行く。八重に花咲く八重の雲。綾に花咲く綾の雲。雲らは天を上つて行く。愛を求めて昇つて行く。

天はますます高くなり、鵜が空をとんで行く。水仙はいまうなだれた。水は激した。怒つてきた。愛は狂亂を訴へる。天は冷くさえ渡る。

愛が地球を貫いた。水が眠りをさましたのだ。子供が地圖をぬりかへる。砂糖を一寸ふりかける。蟻が一杯たかつてくる。

水は大地をうるほした。美はしの苑に花がさく。黄ろい薔薇の花が咲く。眞白の薔薇の花が咲く、薔薇たちは、いつも默つて親しんだ。

鳩鴿は西から飛んでくる。雲は東へせまつてくる。あなたの天ははらんでくる。風は雲こえ鳩鴿こえて、あなたの腹を和らげる。天には

詩が湧いてくる。

天は海面にうつつてくる。海はしづかに天を呼ぶ。天は默つて光つてくる。海は口あけて天を呑む。天は平氣で擴がつた。

あなたの天は低くなる。天が足まで下つてきた。天が踵にくつついた。あなたの腹が溫まり、胸が凉しくなつてきた。地球が天に浮いてくる。木犀草は根を深めた。

あなたの天が高くなる。猩猩が、アリック酒を呑み乾した。ほろほろ鳥がよろめいた。地が引力を切斷した。あなたの腹はひつこんだ。

あなたは苑で休息する。眼をつぶつていつまでも。

太陽が鷲をおつかける。鷲は號令をかけて若鷲をあつめ、牝馬に向つて突擊する。あなたらの心の、炎が燃え上る。同じ處へ同じ時に。火は大空を貫いた。光りは太陽に連つた。

火は大空に燃えて行く。天に應じて燃えて行く。鷲が空から舞ひ下る。火は光りとなり輝きとなり、天をうずめて星となる。星は宇宙から天を見た。

あなたは山から降つて行く。あなたの肩が下つて行く。あなたの胸

が落ちて行く。息吹が静かになつて行く。瑞穂が實つて垂れて行く。野猪たちは豚となる。おじぎ草は、毬狀桃紅花を滿開した。

静かなところで跳躍がおこつた。安らかな平板の上で、喜びたちがおどつて行く。静寂のうちに音樂がひびく。蓮の花は、音もなく、その朝もやに開いたのだ。その音のない響音が、あなたにポンポン、聽へてくる。べにばとが空で鳴いた。雲が笑つた。

海が笑つた。鯨が潮吹いた。鯢が穴から出て暴れた。鯢の暴れるのは喜びであつた。海は美しく、わだつみの神は宴樂された。

梟鳩は山を越せなかつた。風は頂きに上れなかつた。うじ蟲たちは生れてきた。白蟻たちは塔をきづいた。あなたは新しい道をひらいて行つた。山は門となり、あなたは獨りで通つて行つた。

野原が遠くつづいてゐた。花苑は明るく笑つてくる。蛙は池から上つて行く。夏はだんだん近づいた。蛙は大望を胸に抱いて、一度にゲロゲロ鳴きはじめた。

鶴が觀る。千里の下の苔たちを。その苔の上を風が行く。あなたは息吹を和らげて、しづかにおのが心を觀る。心はくらければ、暗いほど、すべての物が光つてきた。鶴が千里を觀るときに、苔らは無限に

擴つた。

火は落ちてまた飛び上り、火の子が明く散りしいた。影が消え、影があらはれ、稻光り、震動し、獅子が勇んで落ちてくる。犀が突く。花が散る。木が崩れる。あなたは心を、かみ碎く。

鳥居は高くそびへて光り、それは一つの鏡となり、あなたは眼を輝やかして立ち止る。山には白い花が咲いた。南から、紫の線が登つてくる。あなたの瞳は明くなり、輝くセピヤの光りとなる。

山から土が落ちてくる。栗の木が高くそびえてゐた。狼たちが驅け

上る。あなたは一散に逃げて行く。裸になつて上つて行く。

草らはみんな芽を出した。地は柔くわれてゆく。底から力が躍つてくる。フリージャの葉がかがやいた。純粹の姿がみんな伸びて行く。白い友、黄ろい友、紅の友、綠の友が、みんな一齊に手を擧げる。あなたの冬は過ぎ去つた。

眞白な天が空となる。眞青の氣が突き登る。そらは碧にそまつてくる。氣は動く。天はますます强くなる。花も木も、朱に綠にそまつてくる。幸福も、不幸も、あなたの心に任せて行く。香りが一杯湧いてくる。

ぐんぐん壓して押しつける。どんどん進んで伸びて行く。毎日新たに增してくる。力は止まつてたまつてきた。熊はふんばつて、歩いて行く。天は谷間に身を深めた。

山が大きく口あけた。鐵砲百合が口あけた。嵐氣は青くは入つてくる。嵐氣は山を養つた。百合は嵐氣を養つた。山は言葉を慎んだ。あなたは息吹をみそいで行つた。

海はぐんぐん擴つた。風はますます吹きつのる。鯨の背骨が曲つてくる。鯨は波をわけてゆく。鯨は何物も恐れない。鯨は波にしたがつた。大きな愛に隨つた。海はあまりに大きかつた。愛は海より大きか

つた。

愛は坎をもとめ、險をもとめ、水は波をのせて流れて行く。水は止まつて苦しんで行く。水仙はそれをみつめてゐる。水仙は水に身を投げた。身を投げても投げても、水は水仙を守つて行つた。水は水仙をうつして行つた。落ちこんでも落ちこんでも、水はすべてを清めて行つた。

光りと炎は輝いた。孔雀は一杯羽根を擴げ、熱と明けとが輝いた。あなたはしづかにそれを知る。草木は柔く土に麗く。光りは炎について行く。あなたは兩手をさしあげた。あなたはみんなに敬禮した。

池の女は笑つてゐた。山の男は感謝した。丹頂鶴が語つてゐた。あなたは靜かにそれを聽く。山百合はその純潔を誇り、夕顔は、感じて花を開いて行く。愛情が少年を呼んだ。心はつひに隨つて行つた。

ぶんぶんうなる蜂。風のさそふ香り。花があり、心があり、道があつた。道は青くつづいてゐた。その行く先は變らなかつた。

天はどんどん逃げてゆく。小犬が後から、おつかける。山が小犬をひきとめる。杉が空まで伸びて行く。岩根は固く動かない。小犬はびつしより汗をかいた。

雲割れて、稻光り、轟き、空は驚いて道をあけ、大きな天があらはれた。正氣は禮をととのへた。壯士は大喝一聲した。あなたは襟を正しくした。

野原は遠く燃えて行く。馬は急いで驅け出した。朝日は高くさし昇る。草らはみんなうちなびく。あなたの胸は柔らかく、あなたの眼は輝いた。あなたの心は進んで行く。

あなたは柔順でありすぎた。あなたは明察でありすぎた。太陽は腹に沈んで輝かず、靜けさは、弱さと誤られた。輝きは消えた。色は失せた。それでも光は内に失せなかつた。沈んでもかくれても、太陽は

宇宙のどこかで光つてゐた。ねむの花が咲いた。闇に中に、うすくれなゐに。

苑の外を風がまもる。園生に鹿があそんでゐる。身體は明く栗色にこげ、臀、白くふつてつどふてくる。雄鹿は正しく角を立て、木の芽の香りに目を細めた。風が光りを貫いた。鹿はたしかに妻をよぶ。鹿は囿から出なかつた。

海は星らにそむいてゐた。鮫は大きく口あける。星はみんなで輝いた。光りは天に退いた。飛魚たちが飛び上る。光りはますます上つて行く。魚は躍つて復落ちる。浪のしぶきは消え散つた。散つても浪は

逆巻いた。光りは冷たく離れても、海を守つて輝いた。

あなたは山を登つて行く。山の上には瀧がある。あなたは瀧を見下した。崖は深くくらく、流れは落ちて、撫子たちものぞいてゐる。あなたの道は窮つた。あなたは霞を吹ひこんだ。あなたは、あなたの眼を閉ぢる。なやみは前になくなつた。嵐氣はひしと身をつつむ。

雲はすつかり集つた。雷たちは鳴り終つた。みんなの凝りがとけてゆく。とどろく雨がふつてくる。草木のはつぱが皆うごく。かへるがまたも飛び上る。水が流れてゆく、音たてて。あなたは罪を、ゆるしたのだ。

あなたはいつでも損をした。みんなは笑つてよろこんだ。牡丹はひらいてゆれてゐる。淵がしづかにたたへてゐる。夕日が明るくまたたいた。あなたはますます損をする。あなたのからだは痩せてきた。あなたの心は肥えてきた。あなたは柔くなつてきた。

あなたの心は擴がつた。風のまにまにひろがつた。人人は喜んで踊り、光りが上からくだつてきた。鳩らは空に道をつけ、草らは土を綠にした。あなたの宇宙は廣くなる。

刄らは花瓣を切つた。刄らは人を斬らなかつた。海は虚空に上つて行つた。少女は父に抱かれた。父は靜かに歩いて行く。

風は熊鷹をひきとめた。熊鷹は妻をよばなかつた。熊鷹は鷲の跡を追つた。風は地上に殘された。風鈴草がゆれてゐる。熊鷹は眼を天に向け、脚をひそめて翔け上る。聲はみ空に鳴り渡つた。

草木はみんなあつまつた。池のほとりにあつまつた。樅、あをぼうもみ、たうひ、つが、シベラス、さざそう、花菖蒲らが、みんな一しよにうつつてゐた。睡蓮はうかび、ほてい草らがためらつた。あなたはそこで土をかぐ。土の笑ひを聽きつづける。土は靜かに順つた。集るものにしたがつた。喜ぶ水にしたがつた。

種は土から芽を出した。芽は樫となり伸びてゆく。風にふかれて强

くなり、諸葉をそろへて高くなり、陽を直受けて昇つてゆく。根はたくましくはつてゆく。土が空まで上つて行く。風が腹から湧きおこつた。樫はあらゆる手を擧げた。

苦しむごとに喜んだ。愛するごとにくるしんだ。刄は綿に包まれても、あなたは信じられなかつた。池には水が無くなつた。水は谷間に落ち込んだ。野菊は枯れてうなだれた。あなたは水をみつめてゐる。あなたは生まうと決心した。

愛の泉を汲みあげる。風車。まはりまはつてくみあげる。上つては愛をくみあげる。下つては愛をくみあげる。鶴らがしづかにとんでく

る。梢に雨がふつてきた。

海中火山の爆發だ。大きな島がうまれてくる。地球の形が變つてくる。あなたはそんなに喜びながら、あなたはそんなに信じない。それでも地球は變つてきた。あなたの心がかはつてきた。太陽は、いつも變らず光つてゐた。心は變つて喜んだ。小鳥がみんな鳴き出した。

その飾羽をなびかせて、蒼鷺ら、今、陽に向ふ。陽ざしの脚はひろがつた。風は梢に雄詰んだ。陽はその耳をたてて聽いた。眼はらんらんと大きくなつた。空は蒸されて氣となつた。

轟く音らは止まなかつた。香りは香りをおつかけた。大地の花はみなふるつた。動物たちは遠くで驚き、植物たちは近くで恐れた。あなたは刄を失なはなかつた。轟きひびく香りの中で、あなたは神に祈つて行つた。

あなたはそこで止まつた。そこは富士山の頂上であつた。そこはヒマラヤの峯であつた。あなたの身體は直となる。虎はその背を伸し、脚を張り、蜷をせおつて止まつた。谷は高さを二分した。巖は疊疊重つた。あなたの位は定つた。

雁は山超へ谷をこへ、はろばろとその道を行く。風は巖と岩をかす

め、女は家へ歸つて行く。女の家は、愛する人の家であつた。女らは生れた家を出で、しづかに、他人の家に歸つた。しなの木も、せんの木も、その山上で枝をならした。

女は家に歸りついた。他人の家に歸りついた。女は喜んでうちふるひ、ほほゑみながら驚いた。けまん草は、うなだれた花をひらいて行つた。不安な悦樂。歡喜の墓場。そこに香りが集つた。彼女は身をさいて、心の護りをお祈りした。

香りらは紫の、光りの上に躍つてゐた。光りらは香りを貫いて進んで行つた。香りはひびきとなつて轟いて行つた。光りと音とは一つと

なり、宇宙は伸び、縮み、醜い生に死を與へ、美はしい死に生をあたへた。ゆたかな生をあたへて行つた。

光りが山をさまよつた。山は光りにあつて止まつた。あなたは裸で歩いて行つた。花苑をもとめてさすらつた。あなたは花苑に宿り、また花苑をもとめ、止まつては身を正し、歩いては災を除いて行つた。あなたは止ることができなかつた。あなたは止らねばならなかつた。そこであなたは趺坐して止まり、闇と光りを引きさいた。死を生命から引きはなした。

青い花瓣は風のまにまに散つて行く。劍は風に從つて舞ひ、香りは

劍を追つて行く。あなたは手をひらき、足をひらき、香りの跡を追つて行く。香らは花にやどり、葉にやどり、言葉にやどり、すべてを和く動かした。劍らは、柔いものらを斬らなかつた。劍は空しく舞ひつづけた。

女は少女を抱いて行く。女はわらふ。少女はわらふ。池がわらふ。水蓮がわらふ。草も勞を忘れて笑つた。人らは苦しみを忘れて笑ひ、死ぬことを忘れて、喜んで行つた。光りらは喜びと笑ひをつらね、あなたは、わたしの詩をうたつた。

風が氷を解いて行く。太陽は愛をあたためる。あなたは、舟に乘つ

て行く。水藻が流れてついて行く。舟は安らに進んで行く。社の屋根が見えてきた。榊が搖れて輝いた。

愛は湖に身を投げた。竹は節根を守つてゐた。愛は湖に浮き上る。水仙たちは歡呼した。竹は水面にうつつてきた。みんな光つてうつつてきた。

鯨は波にうごかない。鯨は濤にゆるがない。鯨は東へ進んで行く。鯨の腹は廣かつた。息は潮の風となる。波は風らを追つかけた。鯨は濤に從つた。鯨は風に隨つた。鯨はいつも笑つてゐた。

猪は山に突進した。烏が一羽とび立つた。猪は牙をきづつけた。猪は山を下つて行く。草木は道を開けて行く。山は笑つて動かない。猪は、自分を下るに任せて行つた。河らはあはれんで、これを止めた。

火が水中に飛びこんだ。水は無くなり火が消えた。生物たちが心配した。また火をおこし水を汲み、惱みと光りを待ちつづけた。

光らは天へ逃げて行く。愛は地球にもぐりこむ。花苑の花がふるへてゐる。川ははげしく流れてゐる。水はだんだん增してきた。愛は惱みとなつて行つた。美はしの苑は流された。それでも太陽は照つてゐた。あなたは再び、美はしの苑を創るであらう。心の苑を作るであら

う。苦しみや樂しみや、動物や植物や人間の、不滅に生きる、美はしの苑を。

愛より外に何もない

乾坤の氣が交つて、流れる愛、燃える愛、貫く愛、靜かな愛、正しい愛、湧き立つ愛、調和の愛、信ずる愛を、生んだといふ。

愛は、よろづのものどもを、搖めく胸に、擁きあげ、盈ちくる、屯氣を生んだといふ。

その稚い生命は、ただ、蒙蒙と、湧き立ち上り、渾沌に、一つの光を、養つた。

光は水を需め、食を求め、生命らは、爭ひ進んだ。爭ひは、また訟となつて、よせ起り、衆い生命どもは、おのも、おのも、需め、もとめ、衆生の海は、たち騒いだ。

愛は、そこで、力となり、衆人を師ゐる力となり、嚴嚴と、統べては進んで行つた。爭ひの搖ぎは和んだ。鬪ひの訟は解いた。あみどりに晴れた天に、風が吹き渡つた。愛はその内で、物を蓄へて行つた。

愛は、禮によつて、惠みの道を、履んで行つた。安らの心の、息は長くなり、常樂、安泰の光は、輝いて行つた。

愛は夢をみて、甘しの時を過ぎた。その時、黑闇の、とざす帳が、天と地を、うちくつがへした。暗はことごとく、否、否と叫んだ。荆棘の衢を、愛は行つた。暗黑の、苛責の海の、機の音が、苦しい

時を、きしんで行つた。

愛たちは、心を合せ、息をあはせて、業因を破る荒磯べの、はかない旅に、同行した。その同人の心は一つとなり、その望みらは、結ばれた。

望みらは愛を追つて、燃えて行つた。炎らは天を衝いた。威神の光は今ここに、大いなるものを包んで行つた。滿滿と溢れるものは和らいで行つた。その和らぎを心にささげ、謙る眞を、愛はしたがへて進んで行つた。

へりくだるものは、豫んで行つた。その心は、やがて、ときめき、うち震つた。

大地の道はつづいてゐた。嫉みの雲がおりてきた。肉を腐す蟲がわ

き、凶の抑へがのしかかつた。愛は力をふるつて行つた。臨みの海が見えてきた。

その道を、愛はたどつて行つた。愛は清風をのぞんで進んだ。行手はややにひらけてきた。繁につきない憂き事らは、たがひに、噬みあひ、嗑まれあひ、自然に解けて、整つた。

照妙に、また光妙に、いはね高嶺がみえてきた。そのたかねに、眞白な花が咲いてゐた。その色も、香りも、妙ながら、ついにはしばしの姿であつた。

愛ははかなく飽きはてて、その裝ひを、かなぐりすて、剝落の、裸になつて進んで行つた。愛は天眞の詩をうたひ、生命は道に溢れてきた。精氣が、息吹の中から湧き、自然の形があらはれた。天は高く、

地は震動して、無妄の道のかなたには、大きな山が聳へてゐた。

愛はその道で、おのづから、德の力を蓄へた、山は空から下つてきた。香りは地から湧いてきた。物はみな、愛をのぞんで頤はれた。物らはみんな喜んだ。愛にはそれが重荷となつた。かれらは、愛を壓迫した。

颶風が海から迫つてきた。たちまち動亂がまきおこつた。愛は坎險におちこんだ。受難の愛は耐えしのんだ。忍んだ愛は、はねおきた。さしくる眞光りが、美しく、愛のはだへに麗きまとひ、また離離とし、燃えさかつた。炎の中を、人人は、山の湖にのがれて行き、みな喜んで止まつた。その人らは、かはらぬ容しに抱きあつた。

愛は人間のなさけに疲れて、天に向つて遯れて行つた。愛は退き、

去つて行つた。生命はしかし、愛を呼んだ。愛は氣力となつて復活した。氣力は憤然天を突いて、一氣に、壯つてひた晋んだ。

愛は進みすぎ、走りすぎ、太陽とともに、地に沒した。愛の光りは夷ぼされ、愛は暗黑の中で、休息をもとめ、安らふ家をたづねて行つた。愛らは家を得て休らつた。愛は人らと、相和した。愛は家人を結んで行つた。家人らは愛に睦いて行つた。愛は爭ひ蹇んで行つた。その綻れ糸の一端から、愛は塞みを解いて行つた。

愛は疲れ、根がつきた。愛はすべてを、損じたのだ。愛の魂は損するごとに、その生命を益してきた。愛は凛凛と、復進んだ。

道は再びひらけてきた。天は高らにそびえてきた。その時風がただよつた。誘ひの風がふいてきた。愛の壯心は止められた。草や木は、

澤のほとりに萃つた。草や木は、愛を圍んで茂つてきた。

その時、烈風が、叫びをあげた。愛はたちまち、飛び立つた。風は大地を吹き升り、愛は無人の野を走つた。愛は向ふを見なかつた。道はすつかりなくなつた。困惑と困難の中に、愛は、深い井戸の穴に落ち、生命の救ひを待ちつづけた。

生命は愛を追ひ、愛を助け、愛を暖め、革めた。愛は鼎を定め、身を立てて、深息吹して震ひ立ち、奮ひ勇んで、進んで行つた。

愛は翼をはつて漸漸と、九天さして進んで行つた。愛は妹らの背にやどり、とつぎの途に立ち寄つた。その時朝日が昇つてきた。愛の力は、豐さかへ、愛の炎は燃えつづけた。その火はしかし、ゆらいできた。ゆらいで山へさまよつた。風らも追つて、さまよつた。惱みをは

なれ、わずらひを忘れ、すべてを信じて、さまよつて行つた。

愛の心は風をえて、喜びのために、とけ渙つた。喜びの色は、しめやかに、節序によつて約められ、中孚によつて、保たれた。愛はその力を惠んで行つた。その力は勇んで動き過ぎた。愛は炎と燃え上り、瀧つ瀨となつて落ちてきた。炎は消され、水は絶え、すべてはすでに濟んできた。

それでも愛は濟まなかつた。生命は愛を促した。火は水上に復燃えた。空は明るく照つてきた。空は炎でかがやいた。道には水があふれてきた。愛の姿は崩れても、愛の心はいつまでも、天地の間に、充滿した。すべては、そこからはじまつた。天地の交はりが始まつた。愛は死ぬことができなかつた。古事記は新しく書かれて行つた。心の苑

の創世記が、新しくまたはじまつた。

愛より他に還る姿は見えなかつた。愛の中には、永遠に、滅びのうたを聞かなかつた。

かたみの花

天つ光りは君が靈を、眞玉手ゆりてさしまねき、君は、需めし眞直なる、愛を護りて、大空へ、あまの沼琴をかきならし、後にのこりし悲しみも、憂き世のこともうち忘れ、去れり、空しき影となりて。

されど、とはなるは君が眞姿。

そはすでに、桎梏はなれし愛の眞姿。

爛斑に染みしおもひ出も、燻ゆる苦しき悲しみも、涙に濡れし水莖

の、跡も貶れて消ゆるとも、君の心はこの魂の、生命の香る爐となりて、肉くちて愛は生き、癡れたる埴はくずるとも、熱き希望は天駆ける、正氣となりて遺るかな。

ああ、根づよくも執したる、君が願ひは只一つ。弱き人らの糧となる、いのちの種子をまかんこと。

そのまかれたる種子の上を、淫けし世人はふみにじり、君はなすべきすべもなく、隙なき吐息たえまなき、怨言いふべき道もなく、弱き力は繁絡む、猛き虚力の現世の、虚僞の業らに負かされて、君ののぞみはみな錆びて、埋みはててはは悲しみぬ。

君の、眼は火と燃えぬ。君は愛しく嚴くしき、愛の炎の眞光りを、息吹き出して惱みある、弱き人らを濟はんと、荊棘おしげる衢にも、

黒闇とざす庭邊にも、強き力をふるへども、からみあらそふ業因を、
燃やし盡さむ一筋の、のぞみは、つひにたえはてて、今はと君は身を
碎き、心をあけに染めはてて、高くも強く吹き上げし、いまはの際の
息吹のみ、あさみどり、晴れて清らの氣となりぬ。

さらば、呼び出でむ、君が靈よ。

いざや、迎へむ、君の笑顔よ。

君の不死なる言葉の靈は、われらの永久詩に、うたひ連ねむ。今ぞ
浮ぶ、君の明る妙なる顏よ。その煩惱の形の中に、とはに光れる、眞
瞳の、珍の光りよ。その光りは、苦しきうちに夢をみて、惱みのうち
に和みつづけ、凶の襲ひの近づきし朝も、曇りなく、人を見守り、わ
れらの心に、ぬれ返し、笑みかへし、今も生きては照妙の、輝きとな

りて、殘れる光。その光、わが心の苑に、美はしの花を惠む。

あはれ、君がかたみ、眞白の花よ。

われはその香り、その色の中に、いまぞ君とともに生きむ、和らぎ
の道を。

彼はかくの如く草木に語つた

あなたらは人間たちの道を行かなかつた。あなたらは、いつでも天に向つてゐた。昔のままにいつまでも、あなたらはその天に伸びて行つた。あるいは一寸だけ、あるいは雲を摩して、あなたらはみな天を望んで行つた。その道にはなんの名もなかつた。その道には、名をつけることができなかつた。

あなたらはいつでも無欲であつた。喜ぶ心を持たなかつた。悲しむ心も知らなかつた。あなたらは、その微を觀なかつた。花が咲いても、實がみのつても、幹はいつでも傾かなかつた。蝶が來た。鳥が舞つた。あなたらはかれらが去つても悲しまなかつた。かれらが來ても語らなかつた。

あなたらは自分の花の美しさを知らなかつた。葉の麗はしさを觀なかつた。善惡の區別を知らなかつた。

あなたらは所有の有無を氣にかけなかつた。難易の判斷をしなかつた。長短を較べて訟はなかつた。高下の競爭はしなかつた。あなたら

は音樂を知らず、音樂たちがあなたらを賞でた。あなたらは前後を問題にしなかつた。あなたらはただ愛を吸ひ、水を吸つた。あなたらは自らなすことはしなかつた。あなたらは言葉を出さなかつた。どんな言葉も、あなたらの敎へには及ばなかつた。あなたらの子や孫は、野山に繁殖した。あなたらは、それを自分のものとは思はなかつた。あなたらは、天を突いて伸びて行つた。それでも、あなたらは自分の力を恃まなかつた。あなたらは花が咲けば散らして行つた。實がなれば落して行つた。あなたらは功名を願はなかつた。それでも功名らは、永遠にあなたらのものであつた。人らはその功名をあなたらの花環に歸し、その優勝をあなたらの葉に任せた。人らは生の喜びをあなたらの花に寄せ、みまかればあなたらの果を拜禮した。

あなたらは人間を賢いとは思はなかつた。あなたらは爭ふことがなかつた。あなたらは貨を貴ばなかつた。あなたらは、そこで財を盜まなかつた。欲しいものが無かつたから、あなたらの心は亂れなかつた。あなたらの心は虛しかつた。あなたらの足は動かず、手は變化しなかつた。あなたらは、腰と腹のみを太らした。幹は强健な骨となり、葉は美しく輝いた。人間たちは知慧をもとめて、いつもあなたらを忘れてゐた。

あなたらの道は、天に沖する道だ。全てを盈たす道だ。あなたらは淵たる生命の宗であつた。その宗には名がなかつた。麋鹿はあなたらの芽をしたつた。鶯も鳩も、あなたらの枝に降つてきた。

あなたらには鋭い牙がなかつた。あれくるふ忿がなかつた。あなたらの花と葉は、天地の光りを和げた。あなたらは、塵にまみれて輝いて行つた。湛として存するあなたらのあるもの、それを私は知らないけれども、あなたらはきつと知つてゐるのだ。天に先だつある象を。

天地は人間をかまはなかつた。人間は空しく天地の犠狗となつた。あなたらは何の世話もしなかつた。人人はあなたらの世話をした。人人はあなたらを伐り倒し、またある時は観賞した。あなたらは、何の不平も言はなかつた。

天地は一つの橐籥となり、あなたらは、一つの母胎となつた。虚中

に愛を生じ無中に愛を吸ひ上げた。あなたらの中心は倒れなかつた。中心が倒れた時には、あなたらは潔く花をちらし葉を失ひ、無心のまに枯れはてた。

あなたらは天の妻であつた。生命の子らはたえなかつた。踏まれても枯れても、あなたらはいつまでも生きて行つた。その生命を、生物達は知らないで用ひた。あなたらも勿論それを知らなかつた。

天はどこまでも高かつた。あなたらはどこまで伸びても限りがなかつた。地ははてしなく深く愛を蔵してゐた。あなたらは吸つても吸つても、愛を盡くすことはできなかつた。そこであなたらは伸びること

と、吸ふことと、高まることと、深まることと、そのことだけをつとめて行つた。あなたらは動くことへ進化しなかつた。あなたらはそこで長生した。あるひは一年一年新生した。あなたらの屍はどこにもなかつた。あなたらは人間たちの私心を知らなかつた。そこで、自然の私を成しとげた。

愛は上善の水となつた。愛はあなたらの中に滿ちて行つた。あなたらの知らぬまに、愛はあなたらを粧つた。あなたらは人間たちを喜ばし、人間たちの嫌ふ僻地を、青く紅に賁つて行つた。道は人間たちの知らぬところで、みな一齊に天に向つた。その道は爭ふ道ではなかつた。それを、人間たちも、尤めることはできなかつた。批評するこ

ともできなかつた。

愛は限りがなかつたから、あなたらは盈すことはできなかつた。天は自由であつたから鍛へても、鋭くすることはできなかつた。あなたらは、金玉堂に滿ちる喜びを知らなかつた。富貴になつて驕る誇りをしらなかつた。功成り名とげた時はただ土と化した。うらやむ者もなかつた。そしるものもなかつた。

營と魄は、あなたらの中で一つであつた。一をしつかり根に抱いて、あなたらは愛からはなれなかつた。あなたらの枝は曲つても、あなたらの花はうなだれても、あなたらの幹も莖も、氣を一つにして伸びて

行つた。その氣は、嬰兒よりもやはらかかつた。あなたらは人を愛し國を愛し、その愛してゐることを知らなかつた。天の開闔(うこう)くときにも靜かであつた。花の咲く時にも響きはなかつた。明白彩美は四方に聽えても、あなたら自身は知らなかつた。

あなたらは氣を生じ、愛を養ひ、その氣も愛も、自分のものとは知らなかつた。香りを發し、精氣を放つて、みづから恃(たの)まなかつた。自ら長(ただ)ち成長しても、みづから支配はしなかつた。あなたらの德は玄(くろ)かつた。あなたらの色は美しかつた。あなたらの美しさは、何ももたない美しさであつた。

あなたらは內を守つて誘はれなかつた。花を散らす風をむしろ待つてゐた。實をついばむ鳥を歡迎した。幹を切られるときは、無心に枯れた。あなたらには外(そと)なる眼(まなこ)はなく、愛と氣にみちた幹が腹となり、その根はふかく、腰となつた。一度も外を見なかつた。すべての外(そと)から眺められた。

あなたらは、無有(むゆう)ところで用(はたら)いた。人らは誰も知らなかつた。

あなたらは內を守つて誘はれず、その幹のために葉をひろげた。愛のために花を開いた。すべての外を見ないから、ただ內己(うち)のみではたらいた。風が吹き、雨が降つても、その坐を動くことがなかつた。

花らは賞でられるときに、その花瓣をうごかした。枝らは折られた時にも靜かであつた。その靜けさも、あなたらは自然に任せてゐた。

あなたらの道は高く爽であつた。その道は希な道であつた。それは微の道であつた。それは一つの道であつた。道は天をゆびさして行つた。

微妙、天に通ずる道であつた。愛らは與として、冬河を渡るやうに猶として四隣を畏れるやうに、儼として貴い客であるやうに、そして渙として釋けながら吸はれて行つた。あなたらは敦として朴をまもつた。曠として空しく、渾として濁りもともに吸ひこんだ。愛は紅と

なり朱となり、紫となり白となり、すべての色の花となり、青と綠の葉となつた。人らはそれを樂しんだ。

あなたらは土に生れて虛を守つた。靜を守つて太くなつた。風にゆられても復元にかへつた。芸芸として、その根に還るのは正氣であつた。根にかへつては靜かに愛を吸ひあげた。靜に還つてはその命を養つて行つた。命を養つてその常容をととのへた。その常をととのへて葉は輝いた。常をたもつて花はその花瓣をほころばせた。ほころぶ姿をみては人らが喜んだ。あなたらはかくして公器となつた。公器となつて天に伸びて行つた。天には益益高くなる道がつづいた。その道を風も曲げることはできなかつた。雨も冒すことはできなかつた。あな

たらは枯れはてるまで、その道を進んで安らかであつた。

人らはあなたらに感謝しなかつた。あなたらの美しさを人はただ自然とよんだ。

人らはあなたらを忘れて仁義を唱へた。人らはあなたらを無視して智慧を究めた。智慧を究めて人らは僞りを知つた。人らは六親爭つてのちに孝慈を勵んだ。國家を昏亂せしめて、忠臣を喚んだ。あなたらは元より仁義を知らなかつた。智慧を知らなかつた。僞りを知らなかつた。忠節を知らなかつた。知るべき混亂をなほ知らなかつた。花は雲に向つて年年咲いた。葉は太陽を受けて日を數へなかつた。

あなたらは聖なるものを知らなかつた。聖なるものよりも尙美しかつた。あなたらは智を知らなかつた。ただ、智なるものよりも美しかつた。あなたらは人を喜ばし、人を救つて、知らなかつた。朴はあなたらの性であつた。無欲はあなたらの德であつた。あなたらは學問を知らなかつた。それゆゑ心配しなかつた。人らはあなたらを倒して紙を作り、文字を記して勉學した。それでも憂ひはたえなかつた。

人らは熙熙として大牢に入つた。あなたらは怕として無欲をまもつた。あなたらは嬰兒よりも尙疲れなかつた。人らはあなたらを食物として、かれらの腹へ取り入れた。あなたらは只愛のみを吸ひ上げた。人らの吐いた不用の氣と汚れた氣たちを攝取して、清鮮の氣を世にあ

たへた。あなたらはただ渾沌たる愚であつた。人らは昭昭たる知の徒であつた。あなたらは太陽の下で昏かつた。花をかざして聖暗を守つた。人らは察察たる利己の徒であつた。あなたらは悶悶として愛を受けた。忽として晦いのは根の深さであつた。漂として止らないのは行く道であつた。頑として動かないのはその幹であつた。鄙しめられて良く生きるのがその性であつた。人らはあなたらを手折り手たき、そしてあなたらを親賞し、あなたらを用ひて家をつくつた。碎くものは人間であつた。静かに生きるものは、あなたらであつた。

あなたらは、道に従ふ他に道を知らなかつた。恍として忽として晝夜をわかたず、恍忽、その中心に愛を抱いた。恍忽、その精髄に象が

あつた。窈として軟いのはその身であつた。冥として醇なるものはその質であつた。あなたらは人らに身を任せて、すべての人らを統べて行つた。自然に生命をあづけて、自然を調へた。あなたらは人らに知られることによつてのみ、人を知つた。人らはあなたを愛してわずかに愛にかへつた。

あなたらの枝は風によつて曲つた。あなたらの根は岩らをさけた。あなたらの幹は人の手に曲げられた。曲つても、枉つても、天に向つたあなたらの道は、いよいよ垂直になつて行つた。垂穂は頭を垂れることによつて。牡丹は頂を傾けることによつて。梅はその身をくねらせることによつて。

しろみみな草は踏まれつまれて、ますますその花を白くした。櫻は散りしいて色香は新しくなつて行つた。桃は實を與へるごとに植ゑられた。榊は一を抱いて神木となつた。

あなたらは人らと爭はなかつた。人らもあなたらと爭はなかつた。人らは互に戰つた。あなたらはたがひに鬪はなかつた。

あなたらは美しい姿のままに言はなかつた。人らは美しさを誇つて語つた。その人らはやがて老いて行つた。人らは死の前に曲つてしまつた。かれらは病にあたつて苦悶した。あなたらは枯れ終るまで成長した。大きくなつた。美しくなつた。病を知らず、苦しみを知らず、

生命を深く守つて行つた。あなたらに飄風が吹き荒れても、一朝を終へずにおさまつた。驟雨が花をおそつても、一日を終へずに過ぎ去つた。あなたらは雨にあらはれ、風に鳴つても、みづからものは言はなかつた。默つて美くしくなつて行つた。

あなたらは何の企てもしなかつた。あなたらは、何を利用することもしなかつた。みづから見はさうとはしなかつた。むしろ谷にかくれ山にひそみ、人らが道をつけて集つてきた。みづから是としなかつたのに、人らはあなたらの詩をつくり、歌を詠んだ。あたたらはみづから伐らなかつたのに、人らはあなたらを誇りとした。人らは各も各も國花を定め、自分らの草木を主張した。あなたらは何にも知らずに

輝いてゐた。すべての草木が美しかつた。その甲乙は人が定めた。

あなたらは、天地に先立つて生じたものを知つてゐた。寂として音なきもの。寥として只一つなるもの。獨立して改らぬもの。周行して殆くないもの。萬物の母となるもの。あなたらはその名を知らないけれども、たしかにそれに通じてゐた。人らは字してそれを道といひ、強いて名づけて大といつた。その大なるものは、ただあなたらの生命の中で、天に向つて還つて行つた。

天は大きかつたけれども、その道は空を貫いて上つて行つた。

靜かなものは躁がしいものの君であつた。あなたら植物たちは、動物たちの君であつた。動物たちは、あなたを食らひ、あなたらはその身を捨てて知らなかつた。

あなたらはその榮觀をもつてゐて、あなたらはその榮觀を知らなかつた。雲に向つてただ燕居した。

あなたらの道には轍迹が無い。あなたらは無言であつたから、瑕謫が無い。あなたらは籌築をもつて、計へる要を知らなかつた。人らは懸命にあなたらを計へ、その果實らに印を捺した。あなたらは繩をもつて物を結び、ものを捕へることを知らなかつた。鍵をもつて物を閉

じる必要もなかつた。あなたらはすでに天地を捉へてゐた。すでに宇宙に關かけてゐた。

あなたらは汚濁の企てを棄てなかつた。糞尿の内に、あなたらは愛を吸ひあげた。不善の人に、その美しい花を觀せた。

あなたらはその雌を知つて雄を知らなかつた。雄らは風がはこび蝶がはこび、自然がはこび、あなたらはただその天を夫とした。あなたらは、高く聳えた谿であつた。あなたらはただ不知の德をのみまもつてゐた。あなたらは、天地の嬰兒であつた。

あなたらがその聖暗を守るときに、あらゆる色の花花と芳香らは、世界の空にあらはれた。色香に人が惑ふ時も、あなたらはその色香をも知らなかつた。あなたらの美しさには極りが無かつた。

あなたらの花は、その榮へを知らなかつた。それでも秦の始皇の榮へもそれには及ばなかつた。不知の德はあなたらをみち足らした。あなたらの扑を道が守つた。その朴はいかなる器よりも深かつた。あなたらは人に割かれることはあつた。それでも人はあなたらの朴を割くことはできなかつた。その朴は人間を制して行つた。

蒼天の下はただ神の器であつた。人は權力をもつてその器を冐し、

あなたらはただ神器をつつむ蒼天に通じた。傾いても、偏つても、その一つの道は眞直であつた。あなたらは甚しいことを知らず、奢りと驕慢をしらなかつた。白菊たちは、その知らない奢りに輝いた。ぼたんたちはその壯麗と富貴を裝ひ、人の驕慢たちをあざわらつた。かれらは已むなく人らに勝つた。人らは繪を畫き造花を作り、はかない奢りを慰めた。その人らは、くりかへして、大軍の後に凶年を迎へ、凶戰の後に荊棘をみた。勝利はすでに荊棘のものとなつた。その勝利を荊棘たちは知らなかつた。それゆゑあなたらは果つても伐ることをしなかつた。知らないうちに、あなたらは、已むなく、人らに勝ち終つた。

あなたらは、壯んになつても衰へなかつた。壯んなままに枯れはてた。苦しみもなく、うめきもなく、あなたらの生は還つて行つた。天なる道へかへつて行つた。

不祥の利器をあなたらは知らなかつた。勝つことをのぞんでは勝たなかつた。人を殺すことを知らなかつた。人に切られても知らなかつた。恬淡として人に勝つた。その人らのみまかる時に、あなたらは、只美しく棺をかざつた。

天地は甘露をあなたらに下した。風はあなたたらの香りを傳へた。小川が江に集るやうに、江が大海に注いで行くやうに、愛はあなたら

の根にあつまり、愛はあなたらの幹を上つた。

あなたらは自からを知つてゐたから、何物をも知る知が無かつた。あなたらは自からすでに克つてゐたから、何物にも、もはや勝たうとしなかつた。すでに、自から足つてゐたから、富を求めないで富を得た。あなたらの富は、枯れても亡びはしなかつた。

道はどこまでも高かつた。道はあくまでも廣かつた。あなたらの道の歩みを、人はすこしも知らなかつた。あなたらは、歩みを止めたことはなかつた。あなたらが歩んでも伸びても、道は止まる時がなかつた。あなたらは行先を忘れて登つて行つた。その道は淡淡たる道であ

つた。それは味がなかつた。それは見るにも足りなかつた。それは聽くにも足りなかつた。それは用ひて旣きなかつた。

あなたらは伸びて行く時に靜かであつた。枯れで行く時も安らかであつた。あなたらは醜惡なものを人間から奪い、美くしいものを人間にあたへた。あなたらはいつも柔く、刄にも劍にも、斧にものこぎりにも身をまかした。あなたらは倒れても悔いなかつた。人らはあなたらをたやすことはできなかつた。あなたらの姿がたえはてたときに、住民たちは亡び去つた。あなたらは任して勝ち、柔弱によつて强剛を制し、花をかざして支配した。

あなたらは、その爲すことを知らなかつた。小さい道を知らなかつた。禮儀も作法も知らなかつた。知識の華を知らなかつた。その禮儀も、その作法もすべてはあなたらに則つた。その禮式の成る處に、人らの忠信は薄くなつた。知識の華の咲く處に、痴愚は無限に始つた。あなたらは、ただ無知の葉を輝やかし、不知の花瓣をゆるがせた。

あなたらは風とともに、その美しい花を散らして行つた。花を散らして實を守り、果を投げすてて繁殖した。

天は清くつづいて裂けなかつた。地は寧かでこはれなかつた。あなたらの伸びて行く道には滅びが無かつた。あなたらはそれでも賤めら

れた。人間よりも、動物よりも、あなたらの位置は低められた。その低められた場所において、あなたらは、全ての高貴の基となつた。碌碌の玉とともに、落落の石とともに、あなたらは、すべての譽れの根となつた。そのあなたらの道は高かつた。その高い道をのぼつて行つた。その遠い道へ還つて行つた。

ある人は、あなたらの道に隨はうとした。ある人はその道を信じなかつた。ある人はその道について大いに笑つた。哂はれなければその道は道ではなかつた。明らかな道は昧かつた。退歩の道をあなたらは進んだ。平坦な道は、ただあの天に向つてゐた。人工の道をのみ、人は行つた。あなたらの上德を人は空しいといつた。輝く聖暗を人は寂

しいといつた。あなたらの德の廣さは無德とされた。晝夜を別たず、休まず建てて行くあなたらの德を、人は偸ると考へた。靜かなものを人は怠惰と見た。安らかなものを固止と觀た。あなたらの美しい花花の中に、人は質實を知らなかつた。あなたらの無限の道を、人は眼で見ようとした。隱れた大道をあゆむ音を、人は外なる耳で聽かうとした。形のないものを分析し、隅のない大方を計らうとした。人はあなたらの道を知らなかつた。人らはその無知をも知らなかつた。あなたらの陰をみて、陽を抱く力を知らなかつた。あなたらの美をみて、大和に連る、一天の沖氣を知らなかつた。

あなたらは柔弱をもつて堅彊を包んだ。香りを放つて刄を抱いた。

爲すことをしないで益をあたへた。その益にまさるものはどこにも無かつた。その益を知るものはどこにも無かつた。

人らは惜しんでは費した。あなたらは花の色香を惜しまなかつた。葉の輝きを隱さなかつた。人らは藏しては亡つた。あなたらは全てを露した。あなたらには家もなければ巢もなかつた。天はあなたらの屋根であつた。地はあなたらの床であつた。人らは物に飽かなかつた。欲を貪つて足ることを知らなかつた。あなたらは道に飽かなかつた。愛を抱いて飽かなかつた。あなたらはその根によつて止まつた。人らは脚によつて歡樂を追つた。

あなたらの目的は高かつた。それは無限に達しなかつた。道は行つても行つてもつきなかつた。あなたらの歩みは完成しなかつた。それゆゑそれは弊きなかつた。愛は無限に湧いてきた。あなたらは愛を盈すことができなかつた。それゆゑそれは窮らなかつた。あなたらは、大直を守つて枝を曲げた。大巧を抱いて花を散らした。大辯のゆゑに默つてゐた。清靜のゆゑに正となつた。

戎馬は郊にいなないた。走馬は劍刄の士を載せた。その行く道に血が流れた。その道は廣げても擴げても狹かつた。あなたらの道は廣かつた。鳥が時時とびすぎた。胡蝶があるひはさまよつた。風が急いで横ぎつた。雲は五色にたなびいた。

あなたらは欲することを要しなかつた。愛の泉のたえた時に、あなたらは、想ふこともなく枯れふした。あなたらは、ただその儘で足りてゐた。あなたらに戸は要らなかつた。牖は一つも要らなかつた。眼ももちろん要らなかつた。あなたらをこそ、みなは見た。戸を開けて牖をひらいて。

あなたらはいつでも貪慾を失つた。失ふごとに美しくなつた。失ふごとに伸びて行つた。あなたらの美しさに、人らはすべて眼を注ぎ、鳥らは枝にさへずつた。蝶らは花にたはむれた。月はゆらめく葉を照らした。あなたらは、不信の人にもその美をあたへた。不善の人にもその美を示した。あなたらは、善と不善を知らなかつた。人らはすべ

て一つであつた。一つの、あなたの嬰兒であつた。

兕虎もあなたらを憎まなかつた。甲兵もあなたらを怒らなかつた。虎もその爪を措かなかつた。あなたらのところには死地がなかつた。死地のない處に、人もけものも荒れなかつた。道があなたらを導いて行つた。愛があなたらを、畜つて行つた。

あなたらを、大きな道が生じて行つた。あなたらを、大きな德が畜つて行つた。物質らは、あなたらの身を創つて行つた。勢らは自然にあなたらに與へられた。あなたらはその道を尊び、その德を敬つた。あなたらに命令するものはなかつた。あなたらはただ成長し生育し、

成り熟し、愛に養はれ、天に覆はれて、すべてを所有はしなかつた。その大成功を、あなたらは知らなかつた。あなたらは誰にも支配されなかつた。何物をも支配しなかつた。その一をのみ守つてゐた。風はその枝にすさむこともあつた。雷がその幹に落ちることもあつた。あなたらは頑として、その一を守つた。あなたらはかくして天下の母となつた。

あなたらには耳がなかつた。眼がなかつた。人らは兌口を開いて行つた。かれらは事務をつづけて行つた。あなたらはその心門をとざしてゐた。終身勤れを知らなかつた。あなたらはその柔中を守つて行つた。光りは花と葉に輝いた。あなたらの内は玄かつた。

人々は徑を作つてあなたらに近よつて來た。飾られた宮から、裝はれた室から、かれらは文綵を服し、利劍を帶び、飲食に厭き、財貨に驕つてやつてきた。かれらはあなたらの前に立つても、尙その盜を誇つてゐた。かれらの道は徑であつた。

あなたらの抱く大德は脫けなかつた。あなたらは休みなく天を祭つた。人らは榊をもつて神を祀つた。人らは時時それを想ひ出した。あなたらはいつでも祭つてゐた。想ひ出す要を知らなかつた。擢鳥もその枝に休らつた。毒蟲もその枝に息ひを知つた。猛獸もその下に身を伸した。あなたらは知られたから知る要がなかつた。あなたらは見られたから、觀る要もなかつた。挫くべき鋭も無かつた。解くべき念

も無かつた。塵に同じ土に安んじ、天下の光りを和らげて行つた。

人人は正を以つて國を治めた。奇を以つて兵を用ひた。無事をもつて天地を爲めることを、かれらは知らなかつた。忌諱を多くしてかれらは貧しくなつた。利器を增す每に國は昏くなつた。技巧にふけつて奇物を生じた。法物を整へて盜賊をいだした。人人はあなたらの道を忘れた。悶悶として玄い聖暗をしらなかつた。醇醇たる自然の富厚を知らなかつた。察察としてかれらは明らかとなつた。缺缺としてかれらは疎薄となつた。無事の道樂をかれらは棄てた。無欲の淸樂を顧みなかつた。

あなたらは手をもつて割へなかつた。葉は廉く光つてゐても他を害はなかつた。矗矗たる幹は只天に伸びた。人人の幸福の内には禍が伏れてゐた。かれらの禍のうちにも僥幸があつた。その極を知るものはどこにもなかつた。かれらは積むべき徳を知らなかつた。進むべき大道を見なかつた。かれらはまた驅けた。坐して天に上る道を知らなかつた。かれらはあなたらの花を切り葉を飾りとしても、みづから天地をかざることはできなかつた。汚氣を吐き、醜惡の言葉を出し、白晝利慾に爭つた。その肉體を衣でかくし、その心情を僞りで祕めた。天眞の爛漫を知らなかつた。無事を事とすることを知らず、無味を味ふことを知らなかつた。怨に報ひるものは憎みであつた。かれらの表情は千變し萬化し、その度毎に醜くなつた。花らの姿は昔のま

までであつた。花らは一つ一つの表情をもたなかつた。全てが天地の表情であつた。一つの宇宙の微笑であつた。

四方の風は、世界の信を通達した。あなたらは輕諾することを知らなかつた。天に向つて、一事をつとめた。その一事は形少く象清く、毫末の愛から生まれてきた。合抱の木もこの毫末から生じた。爛漫たる花咲く樹樹は、寸土の愛を抱いて行つた。人人は月見草を移り氣だといつた。あやめを憤概と名づけた。それでもあなたらのどの小さい花も、どの貧しい葉らも、移り氣でもなく、憤概もしなかつた。人人はあらゆる願望を草木に添へた。草木の願ひは一つであつた。大空に伸びて行くことだけであつた。

あなたらは愚かであつた。幸ひにも、あなたらは、その愚かささへ知らなかつた。人らはあなたらの、その愚かさを、罵ることはできなかつた。あなたらを輕んずることもできなかつた。あなたらは、楷式を具へてしまつた。玄徳を深めてしまつた。大順の中に入つてしまつた。上にゐてその上を感じなかつた。下つて屈辱を知らなかつた。人人はつひに樂んであなたを推した。人人があなたらと爭はないのは、あなたらが爭はないからであつた。

あなたらは聖人を知らなかつた。天下の先とはならなかつた。後れて成器の長となつた。勝つものは爭はなかつた。用ひるものは下となつた。不爭と謙讓はあなたらの性であつた。あなたらは地球の客であ

つた。見られて見なかつた。知られて知らなかつた。執らうとしても兵器が無かつた。仍かうとしても敵がなかつた。あなたらの道は知り易く、行ひ易かつた。それゆゑ人は行はなかつた。人らは困難な道を選んだ。人らは爭ひの道をとつた。あなたらは、その生ずる處を厭はなかつた。その居る處を狹しとしなかつた。あなたらは自ら見さうとはしなかつた。その花らはおのづからあらはれた。

あなたらは爭はないでよく勝つた。雲も鳥も蝶も人も、招かないのにやつてきた。あなたらは死を恐れないから、死をもつて脅すことはできなかつた。柔脆の中に生き堅彊となれば枯れはてた。人らの大怨は和しても餘怨となつた。あなたらは散らされて怨まなかつた。

老子はかくのごとく草木に語つた。草木は何の答へもしなかつた。その二萬種を超へる支那の草木は、爆彈に燒かれ、硝煙に煙りながら年年天に向つて行つた。

秦嶺山脈の北斜面において、針葉樹、濶葉樹の森はつづいてゐた。南支那の一帶において、棕梠、樫、しやくなげ、栗、漆、脂樹の類が繁茂した。竹らは二十米の高さを、その天に立てた。樟樹は香り、バナナは實つた。江南の梅は白く赤く咲き亂れた。その中で戰爭は續いて行つた。

長江は五千一百粁の延長をながれ、流域百八千萬平方粁の五穀に、

その愛の水を注いで行つた。草木は全ての國境を無視して、伸び、刈られ、切られて、復伸びて行つた。草木は黃帝よりも古く遠く、永遠の道を守つてゐた。人人はその道を知らなかつた。

その道に連る國は、支那にはなかつた。その道に連る國は大東にあつた。その國を人は神の國といつた。美しい草木が皆繁つた。櫻らはおのづからこの國に咲きつづけた。山櫻も、里櫻も、彼岸櫻も、枝垂櫻も、富士櫻も、千島櫻も、緋櫻も、丁字櫻もみな咲いた。かれらは朝日の中で、月の下で、雨に濡れて、風にゆれて、白く、明く、淡く美しく咲きつづけた。山櫻には小鳥がたずねた。匂櫻には花虻がとんできた。揚羽蝶がおとづれた。櫻らはみづから神であつた。人人は櫻

を愛し、櫻を感じ、櫻を傷めることはできなかつた。

天津神籬はますます高くなつた。それは遠い昔から、天津磐境に立てられて、國民たちが守つてきた。齋庭之穂はみのりつづけた。神苑の杉は高くなつた。神社の檜は雲にそびえた。深山の榊は茂つて行つた。

大君の皇統はたえなかつた。眞の道は、古のままに、言擧げたまはぬ宮居の内に、靜かにかくれて保たれた。そのことを世界は知らなかつた。世界は猛獸となつて、草木の道を知らなかつた。世界の統一されてゐることを、彼等はけつして知らなかつた。

大君は言擧げ給はなかつた。奔走馳驅をなさらなかつた。放言虛飾をなさらなかつた。かの陣頭に躍りたまはなかつた。ただ祝り給ひ、澄身を祈りたまひ、神籬を守り給ひ、齋庭之穂を思ひたまひ、世界の平和を願ひ給ふた。建國の昔から、その御祈り、その御願ひは、一代も絶えたことはなかつた。

私らも今、世界の苑をおもつた。南歐の口紅水仙をおもひ、喜望峰のひひ草をおもひ、ピレネース山のあやめをおもひ、テキサス洲の花しのぶをおもひ、印度の秋海棠をおもひ、ブラジルの白粉花をおもひ、メキシコのダリヤを想ひ、ジャバのぶどうをおもひ、アフリカの密林を想ひ、シベリヤの草原を思ひ、あらゆる世界の草木を思つた。そこ

には國境のない世界があつた。滅びても榮へても、爭はずして美しい統一があつた。その統一をおもひつづけた。

草木はふるい體制も知らなかつた。草木は新しい體制も知らなかつた。日本は草木の心にかへつて行つた。統一された世界へ還つて行つた。人は眞の民草になつて行つた。

石に代つて叫ぶ者があつた、

石に代つて叫ぶ者があつた

レバノンの香柏は輝いてゐた。イスラエルの家國は衰へて行つた。シャロンの野花は香つてゐた。エルサレムの殿堂はけがされて行つた。コペルの英華は露に濡れた。

炎炎萬丈の氣慨を人は知らなかつた。切切至衷の情を、人は見なかつた。君の善言妙例を、人は悟らなかつた。君の直言徑行を、人は怒

つた。莞爾として笑へば、人は利を求め、嚴乎として指せば、人は去つた。悠悠仰ぐ空にのみ鳩が飛んだ。着着歩む地にのみ羔山羊があそんだ。

君が玄くなれば、人は迷つて行つた。君が明るくなれば、人は目をそむけた。澄然たるものは、只蒼天であつた。燦然たるものは、只太陽であつた。

君が動けば大海千尺の濤が起つた。君が收れば、澄潭深淵の鏡が光つた。君が獨りで祈る時に、皎月は靜かに天を移つた。君がエホバの靈をよべば、閃電はたちまち空を奔つた。正正たる君の警角を人は聽

かなかつた。瑟瑟たる君の清琴を人は避けた。

君はヘルモン山上の雪に叫んだ。ガリラヤ湖畔の雲を喚んだ。純愛の教へは傳へるに道なく、身に泌む神愛には言葉が無かつた。烏合の衆のみが集つて來た。雷同の徒にのみ圍まれて行つた。祭司と權人の怒りは迫つた。棕櫚の葉はみなその手を擧げた。

進んでも死が待つてゐた。退いても死が待つてゐた。班鳩の聲が地にきこへた。山羊の群らがさまよつてゐた。ナルダは風にゆれてゐた。

憂ひの夜が深まつてきた。全靈の祈りは捧げ盡した。熱血の汗は地

に注いだ。谷川の水がささやいてゐた。苦杯は眼前にあらはれてきた。それは呑まねばならなかつた。君の頭には露がおりた。人は生きねばならなかつた。君は死なねばならなかつた。葡萄は知らずに香つてゐた。

番紅花は君の祈りを知らなかつた。橄欖は君の願ひを知らなかつた。君は百合の幸福を知つてゐた。人間の悲しみを知つてゐた。無心の白雲を仰いだ時に。靉く綾雲を望んだ時に。

ゴルゴタの丘は、近づいてきた。弱い人らはわめいてゐた。悲しい弟子らは默つてゐた。無花果樹の果らは青ざめた。園の香りは迷つて

行つた。君の衣は破れ、はだへは裂けた。十字架は双肩に喰ひこんできた。荆棘の冠は、頭蓋を刺した。君はこの世の贖罪を願つた。尖双は肉を破つて血が滴つた。君は容しを神に願つた。一聲、神をよんで地は泣かなかつた。花はその色香を變へなかつた。天は悲しまず、うなだれて行つた。イスラエルの山は動かなかつた。エルサレムの石は叫ばなかつた。谷間の百合は知らなかつた。大海の浪は怒らなかつた。エラナの水は動かなかつた。

石に代つて叫ぶ者があつた。海にかはつて怒るものがあつた。花に代つて泣く者があつた。枯れた血肉はよみがへらなかつた。生きた人らはよみがへつた。

ヒマラヤの雲

山岳障壁地帯の頂きとなつて、ヒマラヤは、萬古の雲を冠つてゐた。ヒンヅスタンの平原を眺め、デツカン半島の高原をのぞみ、昇りくる熱氣に氷をあたへ、湧きくる煩惱に寒風を送つた。

神聖のチュタ樹に白鶴は鳴き、無憂樹上に密蜂が呻き、不凋花ら園にほころぶところ、寶珠黄金は塵芥となつた。榮位名聲は腐肉となつ

た。あなたは月に從つて王城を逃れ、白馬はアノーマの流れを躍つた。ティラカの樹樹は岸邊にならび、鳥らは太陽を迎へて鳴いた。

ヒマラヤの雲がたなびいてゐた。あなたはその雲に向つて行つた。求道の一路は細かつた。大行の道は高かつた。苦行の六年は短かかつた。あなたの肉身は瘠痩した。涅槃をもとめて枯木となつた。印度の樹樹は茂つてゐた。郭公らは囀つた。枯木は生の芽をふいた。あなたは山を降つて行つた。雲は後にたなびいた。

連尼禪河の水澄むところ、雲は五彩の影をうつした。あなたは口をそそぎ、身を潔め、少女の捧げる乳糜を受けた。あなたはしづかに叢

林に入つた。亭亭たる菩提樹が聳へてゐた。樹葉は天蓋となつて輝いてゐた。吉祥の草は蓐となつた。萬花は妙香をただよはせた。

あなたはそこで結迦した。あなたは兩眼をひきさいた。あなたは奥歯を嚙み碎いた。あなたの舌は顎となり、あなたの兩手は一つとなり、あなたの脚は大地となり、あなたの背骨は天柱となつた。空には暗雲が迫つてきた。月も炎炎燃えはじめた。一千の星は皆流れた。颶風は河をくつがへした。ヒマラヤの峯が崩れてきた。葡萄の花房はみな搖れた。妖婉の美女らが飜轉した。軍鼓の音が鳴りひびいた。宮殿高樓が誘つた。あなたは金剛の座を守つた。

劍は花の蓋となつた。惱みは一陣の香風と去つた。あなたは靜樂を身にしつた。あなたは禪の坐を定めた。あなたは苦樂を超越した。あなたは過去を清め、無明を破つた。あなたは生死の相を知つた。あなたは愛慾を解脱した。迷ひの生はこの時につきた。永遠の生はこの時に成つた。蓮の花は皆咲いた。慈愛の水に身を任せて。

あなたは再びヒマラヤを仰いだ。雲らは無心にその法を聞いた。樹は鬱蒼としてこれに答へた。あなたは人に說くことを好まず、人人の聞かないことも知つてゐた。それでも雲らは無心のままに、あの王城にもさまよふた。それでも水も無相の姿を、あの村里にあらはした。あなたも今は人國に向つた。五人の比丘にその法を說いた。六十の弟

子は法輪を轉じた。竹林の精舍に清風がわたつた。祇多林の園に花が薫つた。深夜明月澄み渡る時に、四方の菩薩と問答をした。雷電虚空をつんざいた時に、教團の清規はおのづから成つた。王舍城中に法雲は動き、寶經誦されるところに疫疾は止み、妙法傳はるところに戰亂は終つた。あなたは三界の唯一心を說いた。あなたは般若の智劍を振つた。善財も維摩も、日輪の下に集つてきた。眞理の弟子は一堂に會した。眞如の法緣は擴つて行つた。純信の弟子は水底に沈み、大逆の阿闍世も、その道に還つた。あなたは華嚴の法を說いた。眞俗一如の念佛を示した。法華の妙法を獅子吼した。そのあなたの發した千萬言の中で、あなたはいつでも沈默した。迦葉はこたへてその花を拈り、雲に向つて、ほほえんだ。

あなたの入滅は近づいてきた。求道の婆羅門がはせつけた。彼は妙法を聞き、眞理をさとり、その喜びをあらはすために、あなたを待たずに示寂した。栴檀の葉は輝いた。迦蘆尼迦羅の樹は光つた。沙羅樹の花は皆開いた。ヒマラヤの雲は流れてきた。ガンヂスの水は聲あげた。人は泣き、あなたの氣息はかすかになつた。あなたはかすかな息吹の中で、くりかへし、またくりかへして說き示した。眞理の生命の不死なることを。その肉身の滅び去ることを。

日本の迦藍の上にも、高塔の空にも、ヒマラヤの雲はさまよつてきた。ヒマラヤの雲は、雨となり、また雲に復り水と變り、愛と化して、かぎりもなく、そのさまよひをつづけて行つた。